

主は、主は、主きておられる
Unser HERR lebt

2020 graph magazine vol. 53

Unser
HERR
lebt

Unser
HERR
lebt
主は、主は、主きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ3・3)

vol. 53 定価100円(税込み)

Unser
HERR
lebt
主は、生きておられる

主は、生きておられる
Unser HERR lebt

メッセージ

- 4 イエスの救い(2)「古い人」に対するイエス様の「十字架」の価値
ゴットホルド・ベック

- 19 きょう、もし御声を聞くなら 久田 博

6人の証し

- 29 彼に信頼するものは決して失望させられることはない 吉村全弘

- 38 主は生きておられ、みことばは私を生かします 吉村敬子

- 49 主の遠大なる御計画 館 芳博

- 59 「アバ、父。」 館 幸子

- 71 あなたの重荷を主にゆだねよ。
主は、あなたのことを心配してくださる 熊本智春

- 82 人の歩みは主によって確かにされる 熊本充代

イエスの救い(2)

「古い人」に対するイエス様の「十字架」の価値

ゴットホルド・ベック

前回、私たちは、人間の罪と主イエス様の血潮の価値について三つのことを学びました。第一に、主イエス様の血潮によって神と人との間を隔てている罪という名の壁は取り除かれ、人は神との交わりが可能になりました。これを深く知るなら、第二に、良心の呵責は消え、第三に、悪魔の訴えは効き目がなくなります。

今回は、私たちの「古い人」に対するイエス様の「十字架」の価値について考えてみたいと思います。

かつて私たちは、神を知らず、望みもなく、滅んでいかなければならない自分を見出した時、このように叫びました。「主よ、私は滅びなければならぬ罪深い者です。どうか赦して、救って下さい」と。その時、私たち

は、主イエス様の流された血潮は、すべての罪を聖める力があるということを知りました。そして悔い改めて信仰に立った私たちですが、大部分の兄弟姉妹はさらにその先を経験しているのではないのでしょうか。つまり、私たちは罪を犯しただけではなく、自分自身が罪の本質を根深く持った「罪人である」ということを、認めるようになったのではないのでしょうか。

私たちの内にはひとつの力があり、その力が働く時、罪を犯してしまいます。自分が欲していないのに罪を犯してしまいます。そして罪を犯した後で、私たちは主イエス様の十字架を仰いで、心から悔い改め、罪の赦しをいただきます。

ところが、その罪を赦された喜びもつかの間、また

すぐに別の罪を犯してしまいます。繰り返し、繰り返し、同じ所を堂々巡りしている自分を見て落ち込みます。その姿はたとえて言えば、大人が、信心深い顔をして子供の遊園地に行き、回転木馬に乗って、ぐるぐる回っているようなものです。

罪を犯しては悔い改め、悔い改めてはまた罪を犯し、なかなか進歩、成長がありません。信仰の世界でいつまでも成長せずに子供のままでいるというのは、回転木馬に乗っている大人の姿と同じではないでしょうか。前回申し上げたように、確かに私たちはいつどんな状態にあっても、十字架の上で流された主イエス様の尊い血潮をくぐって、聖である神の臨在の御前に出ることができません。主イエス様の血潮の価値は、どんな大罪をも覆って余りがあります。このイエス様の血潮は、私たちが神のみもとに贖い戻すため、つまり、私たちの犯した罪を赦すために、流されました。

ところが、血潮は、私たちの「罪の性質」を消し去ることができません。

私たちの「古い人」、つまり生まれながらの性質をどうにかしなければならぬという問題は残るのです。そして、この「古い人」の問題を解決してくださるのも、やはり、イエス様以外にはおられないのです。私たちはどんな悩みがあっても、どんなに難しい問題であっても、それに対する神様の答えは、いつも御子イエス様です。御子イエス様は私たちの身代わりになって死なれ、永遠の贖いのみわざを成し遂げられました。私たちのために死なれたこのイエス様は、三日目によりがえられただけではなく、今も、私たちを自由にし、解放することを願って生きておられるのです。

パウロは「もはや私が生きているのではなく、キリストが私の内に生きておられる。」(ガラテヤ2:20)と言っています。これが私たちの内に事実となる時、初めて主イエス様は私たちの真の解放者となるのです。

いったい、私たちのいのちの支配者、生活の支配者は誰でしょうか。自分でしょうか、イエス様でしょうか。これに対する答えを聞けば、その人の信仰生活が

イエスの救い(2) 「古い人」に対するイエス様の「十字架」の価値

前進しているか、それとも敗北に終わっているかがすぐにわかります。私たちは信心深い顔をして、回転木馬に乗っているような者にはなりたくないものです。

罪の重荷を背負ったまま、主の御前に出て、その赦しをいただいた人は本当に幸いです。けれども、その状態に留まったままでいてはだめです。「罪の力」から解放されること、生まれながらの性質から解放されること、「古い人」から自由になることが大切です。このためには、どうしても十字架が必要です。主イエス様が十字架で流された血潮によって、私たちは罪を赦され、贖われ、神との平和を回復しました。しかし、血潮は私たちの生まれながらの性質を「消し去る」ことはできません。十字架が必要なのです。

そこで、次の三つの点について、少し一緒に考えてみたいと思います。第一番目は、アダムから受け継いだ罪の性質について。第二番目は、アダムのうちにあるのか、キリストのうちにあるのか。第三番目は、罪からの解放のための神の方法についてです。

さに、恐れおののいたことですが、イエス様によって罪が赦されてから後も、行なったこと、行なうことに気をとられているのです。

たとえば、時々次のように考えるかもしれません。「私は大した者ではないが、聖書をよく読み、よく祈り、ご奉仕をよくする。だから立派なキリスト者だ」と。

しかし実際には、なかなか自分の願うような状態に自分になっていきません。問題は外側に表れた祈りやご奉仕ではなく、私たち自身、私たちの魂がどうあるかが問題なのです。私たちは、心から主に喜ばれたいと願っています。そう真剣に願っています。けれども心の内を顧み、深く自らの魂を覗き見るなら、そこに何か主に喜ばれないものがあるのに気がつきます。謙遜でありたい。しかし自らを謙遜にさせない何かがあります。自分に強いてでも、相手を愛したい。しかし、愛せない何かがあります。これに気がつく時に「主よ、私のすることが罪であるばかりでなく、私自身が罪人です」と言わざるを得ないのです。いったい人間は、ど

1. アダムから受け継いだ罪の性質

これについて、主にローマ人への手紙5章12節から21節に詳しく書き記されていますが、ここでは19節だけお読みします。

すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのです。
(ローマ 5:19)

この節の中で、御霊は二つのことを私たちに教えて下さっています。一つは、私たちはどういう者であるか、すなわち私たちは罪人であるということ。もう一つは、この罪はどこからやって来たのか、「最初の人」アダムから（ひとりの人の不従順によって）やって来たということを教えています。

私たちは、信仰生活の第一歩を踏み出してからも、自分がしたこと、また、することに気をとられています。御霊によって罪が教えられた時、そのあまりの恐ろし

うして罪人になったのでしょうか。

前のローマ人への手紙の5章19節には、アダムの不従順によって人間に罪が入ってきたと書いてあります。

たとえば、私はベックと申します。「ベック」というのは私が生まれた時に、自分で一生懸命、名前の本を調べ、これは良い名前だと思って付けたわけではありません。このベックという名は、私の父の父、そのまた父、ずっと昔の先祖が付けた名前です。私の行なったことではありません。私がたとえ、この名前をどんなに嫌ったとしても、変えることはできません。たとえ私が乞食になっても、大統領になっても、まあ、ならないでしょうが、やはりベックです。

私たちはなぜ罪人になったのでしょうか。私たちのせいではありません。アダムのためです。私たちが罪を犯したから罪人なのではありません。アダムが罪を犯したとき、アダムの内に私たちがいたから私たちは罪人なのです。

アダムは「最初の人」です。全人類はアダムの子孫で

す。ですから、全人類はアダムにあつて罪人なのです。

ひとつの例をとってみるなら、私の子供は私が結婚したので生まれました。私はドイツで婚約して、日本で結婚しましたが、もし私が日本に来る途中、台風で船が遭難し、死んでしまったなら、私の子供は生まれませんでした。生まれるはずの子供は、私とともに海の中に死んだはずです。そのように私たちも皆、アダムとともに、海の中にはなく、罪の中に死んだのです。

聖書は、アダムが罪を犯した時、私たちもアダムの中にあつたため罪人となったと言っています。私たちはアダムの子孫です。子孫としてアダムの罪の性質を持っています。ですから問題は、私たちが何を行なうかだけではなく、私たちがどのような存在であるかという私たちの本質が問題です。

この罪の性質から解放されなければなりません。もし解放されないなら、信仰は成長することがありません。いつまでも信心深い顔をして、回転木馬に乗っていないければならないということになってしまいます。

私たちの生まれながらの性質は、罪の性質です。私たちは生まれた時に、もうすでに罪人という運命に決定づけられていたのです。

もう一つのたとえを話します。日本人がドイツで生まれたとします。彼は日本語を話せません。ドイツ人のようにドイツ語を話して生活したとします。けれども、日本人は日本人です。同じように、その人がたくさん罪を犯すか、少ししか罪を犯さないか、それは問題とはなりません。本質的に罪の性質を持っているということです。人間は罪の性質を持って生まれましたから、罪を犯します。

では、イエス・キリストを信じ受け入れて神の子になっても、相変わらず罪を犯すのは、いったいどういうわけでしょうか。それは、その人が罪の性質の問題を解決していないということです。

なぜ鳥は鳥なのでしょうか。鳥として生まれたから鳥なのです。鳥は飛ぶことができるから鳥なのではありません。病気になって飛べなくなった鳥も、鳥は鳥

です。では、なぜ人間は罪人なのでしょうか。罪人として生まれたから罪人なのです。

続いて第二番目の点、「アダムの内にあるのか、キリストの内にあるのか」について考えましょう。

2. アダムの内にあるのか、

キリストの内にあるのか

アダムの内に、またキリストの内に、と言うのはいったい何を意味しているのでしょうか。

アダムの内にあることは絶望を意味し、キリストの内にあることは希望を意味しています。前にも引用したみことばには、アダムのことばかりではなく、キリストについても書かれています。

すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によつて多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によつて多くの人が義人とされるのです。(ローマ 5:19)

アダムによつて罪がこの世に入り、罪によつて死が入ってきました。アダムによつて、全人類は望みのない罪人となつてしまいました。ところがこの暗闇の中に、ひとすじの光が差し込んで来たのです。それは「ひとりの従順によつて多くの人が義人とされる」、すなわち主イエス様の従順が全人類を救うのです。

アダムの内にあるということは、罪人であるということ、また罪の性質を持っているということの意味しています。聖書からダビデ、ペテロ、ヨブ、そしてパウロの告白をお読みします。ダビデは次のように告白しています。

ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみこまりました。(詩篇 51:5)

ペテロは、イエス様のことば通りに従つて大漁を経験したとき、「イエスの足もとにひれ伏して、『主よ。私の

ような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。』と言った。」(ルカ5・8)と記されています。ペテロは「主よ。私のような者から離れてください」と叫んだのです。幸いなことに、イエス様はペテロから離れませんでした。イエス様は、ペテロの罪をすべて赦してください、それから彼をご自分の弟子としてくださったのです。

ヨブは、主が全能者であられることを見たとき、「それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。」(ヨブ42・6)と告白しました。

パウロもまた、自分の内を見せられて次のように告白しました。

そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。

(ローマ 7・21)

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んで

いないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

(ローマ 7・18)

「アダムの内にある」ということは、罪人である、また罪の性質を持っているということの意味しています。彼らの告白を見てお分りになったことと思います。これに対して「キリストにある」ということは、神の子であること、神の性質を持っているということの意味しています。エゼキエル書を見てみましょう。

その美しさのために、あなたの名は諸国の民の間に広まった。それは、わたしがあなたにまとわせたわたしの飾り物が完全であつたからだ。——神である主の御告げ。

(エゼキエル 16・14)

雅歌には、「ああ、わが愛する者。あなたはなんと美しいことよ。なんと美しいことよ。あなたの目は、顔おおい

のうしろで鳩のようだ。あなたの髪は、ギルアデの山から降りて来るやぎの群れのよう、…わが愛する者よ。あなたのすべては美しく、あなたには何の汚れもない。」(雅歌

4・1、7)と書かれています。

そしてマタイの福音書には、「すると、人々が中風の^{ちゆうふう}人を床に寝かせたまま、みもとに運んで来た。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、『子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。』と言われた。」(マタイ9・2)と記されています。パウロが諸教会へ宛てた手紙には、次のように書かれています。

キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。そしてあなたがたは、キリストにあつて、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と權威のかしらです。

(コロサイ 2・9～10)

あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神

このような箇所を見るとわかりますが、アダムの内にいることは絶望であり、キリストの内にいることは希望であります。私たちは生まれながらの性質から解放されなければなりません。

パウロは信者たちに向かって、「恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。」(ローマ6・1)と尋ねています。「絶対にそんなことはありません」と続いて答えています。極みまで聖である神が、汚れた人間を良しとされるでしょうか。そのまま満足されるでしょうか。聖書は、語っています。

絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。

(ローマ 6・2)

イエスの救い(2) 「古い人」に対するイエス様の「十字架」の価値

それでは、主は、私たちが生まれながらの性質から解放されるために、備えをしてくださっているのでしょうか。私たちは性格的に弱い者です。けれども、その弱さの上に恵みが与えられました。神の強さと信仰が生きて、加えられました。

私たちの持っている最も弱い点が、強い点となり得るのです。

最後に、罪の力から解放されるための神の方法について、一緒に考えてみたいと思います。

3. 解放のための神の方法

私たちが罪から解放される方法も、二つの点に分けて考えることができます。一つは、「最後のアダム」であるイエス様の死です。二つ目は、「第二の人」であるイエス様のよみがえりです。

これまで、人類はアダムの内にあって罪人となったという事実を学んで来ました。では、いったいどうしたら、アダムの内にいる私たちがそこから逃れ出るこ

とができるのでしょうか。

主イエス様の十字架の血潮は、私たちの罪を赦し、贖いを成し、神との平和を与えてくださいました。しかしその知識があっても、アダムの性質、つまり罪の性質からは逃れ出ることができません。主イエス様の血潮ではアダムの内からは解放されません。では信者はどのような方法によって、罪から自由になることができるのでしょうか。

人は元々、アダムの性質に預かって生まれて来ます。そして死ねば、アダムの性質から逃れられます。死ぬことによってのみ、罪の性質から逃れることができるのです。

ですから問題は、いったいどうしたらアダムの内にある自分が死ぬことができるかということです。私たちは、自分で死のう、死のうと試みますが失敗に終わります。肝心なのは、私たちが自分で死のうと努力するかわりに、神様が私たちを罪の力から解放するため、何をなされたかを知ることです。ローマ人への手

紙に次のように書いてあります。

それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。

(ローマ 6:3)

ここに「私たちは…その死にあずかるバプテスマを受けた」と書かれています。どうしたらイエス様の中に入って死ぬことができます。自分でどんなにもがいても、どうすることもできないのであります。ですから神が成して下さいました。私たちは、もうすでにイエス様の内にいるので、その心配は必要ないのです。主である神様があわれみにより、私たちをキリストの中に入れて、キリストの内においてくださったのです。聖書は語っています。

しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうち

イエスの救い(2) 「古い人」に対するイエス様の「十字架」の価値

にあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとなりました。

(1コリント 1:30)

ここに「あなたがたは…キリスト・イエスのうちにあるのです」と書いてあります。私たちは間違いなく、確かにキリストの内にあるのです。私たちは、どんなふうにもキリストの内に入ったのかを知りません。しかしもうすでにキリストの内にあることを、神のみことばによって、十分に知ることができるのです。

私たちは、幸いなことにもうすでに主イエス・キリストの内にいます。これは神のなされたみわざです。これは、私たちがそれを信じようが信じまいが、また、それを感じようが感じまいが、動かすことのできない神の事実です。主イエス様が十字架で死なれた時、私たちもイエス様とともに死んだのです。なぜなら、私たちはイエス様の内にいたからです。みことばは言うています。

私たちはこう考えました。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。

(2コリント 5:14)

主イエス様が十字架におかかりになったその時、私たちも十字架にかかったのです。たとえば、私が今持っている本に一枚の紙をはさんだまま、仙台に送るとします。紙を送るつもりはなかったのですが、とにかく本の間に挟^{はさ}んであったので、この一枚の紙も本と一緒に仙台へ行ってしまいました。本だけが仙台に行つて、この一枚の紙は広島に行くというようなことはありません。

「あなたがたは…キリスト・イエスのうちにあるのです」。主なる神は、私たちをイエス・キリストの内に入れてくださいました。ちょうど、本の間に紙が挟まっているように、私たちは主イエス様の内にありましたから、主イエス様が十字架にかかれた時に、私たちも十字架にかかり、主イエス様が死なれた時に、私たち

去形になっています。

次にガラテヤ人への手紙を読みましょう。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によつていのです。(ガラテヤ 2:20)

ここでも同じように「私はキリストとともに十字架につけられました」と過去形が使われています。

キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。

(ガラテヤ 5:24)

ここも過去形で「つけてしまったのです」となっています。

イエスの救い(2) 「古い人」に対するイエス様の「十字架」の価値

ちもともに死んだのです。ですから、「十字架につけてください」と神様に願う必要はないのです。

主イエス様が亡くなられた時、私たちもともに死にました。ですから、私たちの死はもう終わったのです。これから死ぬ、ということはあり得ないのです。新約聖書のどこを開いても、私たちはもうすでに主イエス様とともに死んでしまっていると語っています。これに関連しているいくつかの聖書の箇所をお読み致します。次のローマ人への手紙6章で「私たちの古い人」というのは、私たちの生まれつきの古い性質のことを指しています。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。(ローマ 6:6)

ここで「キリストとともに十字架につけられた」と過

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあつてはなりません。この十字架によつて、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。

(ガラテヤ 6:14)

ここでも過去形が使われています。これらの箇所を通して、ほんとうに、私たちはもうすでに主イエス様とともに死んでしまっていると、はっきりとわかるのです。

誰も、自分で十字架にかかつて自殺することはできません。自分で自分の両手、両足に釘を打つことはできません。打つことができて、片手くらいです。これと全く同じように、私たちは、自分で自分の罪の性質を取り除くことはできません。神様が私たちを主イエス様の内に置きましたから、主イエス様が十字架におかかりになった時、私たちもともに十字架につけられました。私たちも主イエス様とともに十字架に

つけられたということは、教えでもなく、理論でもありません。永遠に変わらない神の事実なのです。

また、主イエス様の死とよみがえりは、私たちの身代わりでした。主イエス様が十字架の上で亡くなられ、あの罪のない、しみのないご自分の体を私たちにお与えになったのは、あの尊い血潮を流されたのは、私たちの恐るべき罪を贖って、神の聖と義を満足させるためだったのです。

この救いの業、贖いの業は、主イエス様だけが成し遂げられたのです。いかなる人間と言えども、この業に加わることはできませんでした。聖書のどの頁を読んでも、私たちの血潮が主イエス様の血潮とともに流されたなどということは書いてありません。神の御前におけるこの贖いのみわざを、主イエス様はおひとりで成し遂げられました。

しかし主イエス様は、ただご自身の血を流すためだけに亡くなられたわけではありません。私たちとともに死ぬために、血を流して亡くなられたのです。主イエ

スです。「第二のアダム」とは呼ばれていません。また、「最後の人」ではなく「第二の人」と呼ばれています。どうしてでしょうか？

「最後のアダム」としてのイエス様の中に、全人類は含まれています。また「最後のアダム」として、イエス様は、罪に墮落し、囚われの身となっている全人類とともに、裁きと死に服されたのです。

そして「第二の人」として、主イエス様は新しい人類のかしらとされました。また「第二の人」として、主イエス様は新しい全人類とともによみがえられました。その中に私たちも含まれていたと聖書は告げています。

もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。

(ローマ 6:5)

愛する兄弟姉妹よ。私たちは「最後のアダム」として主とともに死に、「第二の人」として、主とともによみ

イエスの救い(2) 「古い人」に対するイエス様の「十字架」の価値

ス様は、私たちの身代わりに亡くされました。主イエス様の死に、あなたも、私も、含まれているのです。というのは、神が私たちを主の内に入れ、私たちは主イエス様とともに十字架で死んだからです。主イエス様の死の中には、あなたも、私も全人類が含まれています。全人類は、主イエス様とともに死にました。

そして、主イエス様の死ばかりではなく、主イエス様のよみがえりも、あなたと私を含んでいます。全人類は、主とともによみがえらされたのであります。

コリント人への第一の手紙15章に次のように記されています。

聖書に「最初の人アダムは生きた者となった。」と書いてありますが、最後のアダムは、生かす御霊となりました。：第一の人は地から出て、土で造られた者ですが、第二の人は天から出た者です。(1コリント 15:45、47)

この中で、イエス様は「最後のアダム」と言われて

がえりました。ですから、私たちをアダムからキリストの内に移したその力は、「十字架」にあったわけです。ここまで、生まれながらの性質、古い人について考えて参りました。私たちは、この問題の生まれながらの古い人、性質は、主の十字架によって、もうすでに取り除かれていることを見て来ました。私たち、主イエス様を受けた者の内で支配しているのは、古い人アダムの性質ではなく、主イエス様のいのちです。そしてイエス様はご自分の栄光を、私たちの内に現わそうとなさるのです。これこそが罪の力からの解放です。

十字架はなぜ、私たちに必要なのでしょう。イエス様がご自分のいのちをあなたの内に、また私の内に住まわせるために必要なのです。もう一度コリント人への第一の手紙1章を読みましょう。

あなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとなりました。

「知恵」とは何でしょう。それは主イエス様です。

「義」とは、「聖め」とは、「贖い」とは何でしょう。それは主イエス様です。私たちが至るべきその聖は、主イエス様です。

あなたは、自分の高ぶりに気がつき、謙遜になりたいて思っておられるかもしれませんが。けれども謙遜を求めても、それは得られません。あなたが求めなければならぬのは、主イエス様だけです。

神は、忍耐、愛、謙遜、柔和を一つ一つ分けてあなたに与えることはできません。しかし主である神様は、私たちにもうすでにイエス様を与えてくださっています。私たちが、主イエス様により頼み、イエス様を心に豊かにお迎えするなら、イエス様が私たちの謙遜であり、忍耐であり、愛となってくださいます。

主である神は、忍耐や愛や謙遜を売りさばく商人のような方ではありません。神は、私たちのいのちとな

るように、主イエス様を私たちにくださいました。私たちは、無理にクリスチャンらしい生活をする必要はありません。ただ自分を主に明け渡して、主イエス様が私たちの内に住まれることを、許しさえすれば良いのです。パウロが書いています。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。(ガラテヤ 2:20)

パウロと同じように、私たちひとりひとりが「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」というこの堅い信仰の内に立ちたいものです。

きょう、もし御声を聞くなら

久田 博

主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。(2ペテロ 3:9)

聖書のまことの神様と私たち人間との関係を、次の三つの点から考えてみたいと思います。

1. 私たち人間をお造りになった神様の「みこころ」とは何か

2. 罪に汚れた人間に対する神様の「更なるみこころ」とは何か

きょう、もし御声を聞くなら

3. 「きょう、もし御声を聞くなら」私たちは何をなすべきか

1. 私たち人間をお造りになった神様の「みこころ」とは何か

神様の「みこころ」は、天地創造の時代から今に至るまで全く変わることはありません。私たち人間と永遠に親しい交わりを持ちたいと望んでおられること、これこそが神様の「みこころ」であります。

聖書を読むと、神様は人間に対してしばしば極めて厳しい態度を取っておられます。しかしそれは「愛するがゆえの懲らしめ」と言えます。

懲らしめの背後には、常に私たち人間一人一人を「かけがえのない大切な存在」として愛してくださっているという事実を、次のみことばから知ることができません。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。
(イザヤ 43・4)

女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎^たの子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。
(イザヤ 49・15)

このように私たちは、神様の変わらぬ愛の対象とされています。なぜなら、母の胎の中で私たち一人一人を実質的に造り上げた方は、ほかならぬ神様ご自身だからです。

わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光の

とに彼らを創造された。
(創世記 1・26～27)

ここで「われわれ」と複数形で記されていますが、決して多くの神様がおられるわけではありません。「父なる神、御子イエス様、聖霊」は、一般に「三位一体の神」と呼ばれており、あくまでも唯一神であります。

そして、人はこの神様に似るように、即ち、その特徴や性質に似るように造られ、神様との交わりが可能となるために「霊」が与えられました。

その後、神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は生きものとなった。
(創世記 2・7)

「神は霊です…」(ヨハネ4・24)とある通り、神様は霊であり、目に見えない存在です。従ってその神様との交わりを可能とするためには、私たち人間に「霊」が与えられなければなりませんでした。

きょう、もし御声を聞くなら

ために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。
(イザヤ 43・7)

「このわたしはあなたを忘れない」とは、私たちをお造りになった神様だからこそ抱かれる特別な思いではないでしょうか。このような思いをもとに、私たち人間と「永遠に親しい交わり」を可能とするために神様がなさったのは、次のことです。

神様は、人をご自身に似るようにお造りになりました。聖書の最初の巻である創世記には、神様が天地万物を造られた後、人間を造られた様子が次のように記されています。

そして神は、「われわれに似るように、われわれのたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女

「いのちの息を吹き込まれた」とは、人間に「霊」が注がれたことを意味しています。そして注目すべき点は、すべての生き物の中で、ただ私たち人間だけに「霊」が与えられていることです。それは、天地創造以前から神様が私たちを選び、ご自分の子にすることによって、「三位一体の神」の永遠の栄光の交わりの中に私たち人間をも加えようと願われたからにほかなりません。

神は私たちを世界の基^{もと}の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによつてご自分の子にしようと、愛をもつてあらかじめ定めておられたのです。
(エペソ 1・4～5)

ここまでをまとめると、次のように言うことができます。

父なる神様は、天地創造の後、新たに人間をご自身に似るよう創造され、更にその人間に「霊」をお注ぎ

になりました。その理由は、将来私たちを「神の子」とし、イエス様を長子とする「神の家族」を築き上げ、神と人との永遠の霊的な交わりの中に招き入れることを望んでおられたからです。

以上が、私たち人間をお造りになった神様の「みこころ」であります。

しかし、この壮大な計画を邪魔する者が現れました。それが蛇(悪魔)です。聖書は、初めの人アダムが蛇にそそのかされて神様との約束を破った結果、その後の全人類に「罪」が入ったと告げています。

聖書で言う「罪」とは「神様に逆らって生きようとする性質」のことですが、この「罪」が私たちに与える影響について、イエス様は次のように語っておられます。

また言われた。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これら

とある通りです。

せつかく神様から「霊」をいただいたにもかかわらず、「罪」のために私たちの「霊の目」は曇り、神様との霊的な交わりは不可能になりました。これが「霊的な死」であります。

更に、私たちはこの「霊的な死」とどまらず、「肉体の死」と「死後の裁き」をも運命づけられてしまったと、次のみことが示しています。すべては「罪」のもたらす結果に他なりません。

人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている…
(ヘブル 9・27)

2. 罪に汚れた人間に対する神様の

「更なるみこころ」とは何か

聖書を読むと、アダム以後の人類の歴史は、一部の例外的な人々を除いては「主なる神様に対する反逆の歴史」と言えるのではないかと思います。

きょう、もし御声を聞くなら

の悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」

(マルコ 7・20～23)

私は生まれてから今まで、一度も「悪い考えを持つたり、人をねたんだり、他人の悪口を言ったり、高慢になったりしたことはありません」と言える人は、世界中で一人もいないのではないのでしょうか。これらのすべての「悪(複数の罪)」は、心の中に潜む「神様に逆らう性質」即ち「根源的な罪」の結果として、人の外側に出て人を汚すのです。

しかし、「罪」がもたらす弊害は、決してこれだけにとどまりません。

「罪」は私たちに致命的な災いをもたらすことを、私たちは知らなければなりません。それは第一に「霊的な死」、第二に「肉体の死」、そして第三に、「死後の裁き」です。そして、これらすべての原因は、私たちの「罪」が「神様の怒り」を引き起こしたことに對する報いなのです。「罪から来る報酬は死です。」(ローマ6・23)

しかし、神様は、「罪」のために滅びに向かう人類を決して見捨てることなく救いの手を差し伸べて下さいました。それが「イエス様の十字架」です。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

(ヨハネ 3・16～17)

このみ言葉にある通り、「御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つ」こと、これが主なる神様にとつての「更なるみこころ」となったのです。

しかし、罪ある人間が、罪人の身代わりとなることは決してできません。

何の罪も汚れも無い神の一人子イエス様が、十字架

について贖いの死を遂げてくださること、それが私たち罪人を滅びから救い出す唯一の方法です。神様がイエス様をこの世に遣わされた目的とは、愛する御子を十字架上で犠牲にすることによって、この「更なるみこころ」を実現するためでありました。

わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。
(ヨハネ 10・11)

このように仰ったイエス様は、父なる神様の「みこころ」に従い、「なだめの供え物」即ち、神様の怒りをなだめるためのいけにえとして、十字架に架かり、死んで葬られ、そして三日目によりみがえってくださいました。

このイエス様の十字架の贖いにより、すべての人間の罪は赦されています。

ですから必要なことは、イエス様がほかならぬ私の罪のために十字架で死んでよみがえってくださいったという事実を信じ、感謝しつつ自分の罪を悔い改め

このみことばの通り、イエス様が最初から強い意志を持って「滅んでいる人」を救うために会いに行かれた例を、聖書から二つ見てみましょう。

まず一つ目は、取税人ザアカイのケースです。エリコの町にザアカイという取税人のかしらがおりました。彼は、ローマのために税金を、しかも不当に取り立てて私腹を肥やしていたので、同国人からは非常に嫌われておりました。しかし、そんな自分であるがゆえに彼の心の中では、後ろめたさや神様に謝りたい気持ちなどが渦巻いていたに違いありません。そのザアカイが取った行動は次の通りです。

彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることができなかった。それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来

きよう、もし御声を聞くな

ること、それだけです。

3「きよう、もし御声を聞くな」

私たちは何をなすべきか

イエス様は、この世に来られてから十字架にお架かりになるまでの間に、「罪」の中で苦しみ悩む人々を徹底的に探し、その救いのために力を尽くしてくださいました。そのイエス様がお語りになったみことばを、見てみたいと思います。

「人の子は、滅んでいる者を救うために来たのです。」あなたがたはどう思いますか。もし、だれかが百匹の羊を持つていて、そのうちの二匹が迷い出たとしたら、その人は九十九匹を山に残して、迷った二匹を捜しに出かけないでしょうか。そして、もし、いたとなれば、まことに、あなたがたに告げます。その人は迷わなかった九十九匹の羊以上にこの二匹を喜ぶのです。(マタイ 18・11～13)

なさい。きようは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行つて客となられた。」と言つてつぶやいた。ところがザアカイは立つて、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」

(ルカ 19・3～8)

イエス様は、木に登ったザアカイに対して「きようは、あなたの家に泊まることにしてあるから」と声をかけておられます。そして、ザアカイもまたこの主イエス様の呼びかけに素直に答えて、「急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた」ばかりでなく、「私の財産の半分を貧しい人たちに施し」、「だまし取った物は、四倍にして返します」とイエス様に約束したのです。

そこでイエス様は、次のように仰いました。

てはならない。

(詩篇 95・6～8)

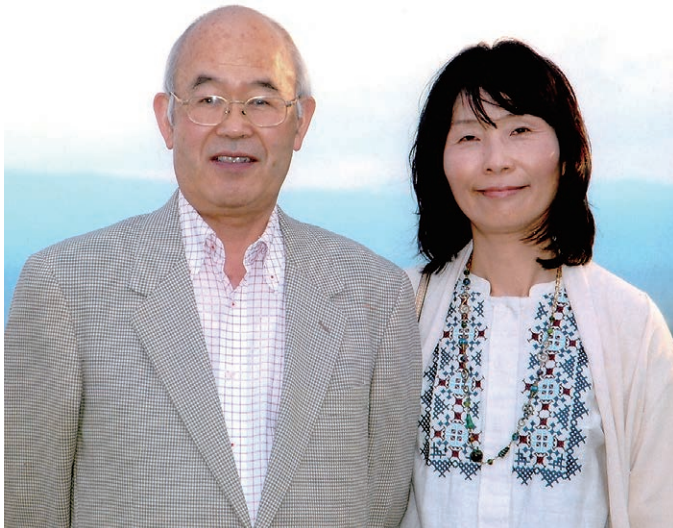
まだイエス様をご存じない方は、きょう、もし御声を聞くなり、決してかたくなに拒むことなく、ザアカイやサマリヤの女のように素直に主イエス様を受け入れて「救い」にあずかっていただきたいと心から願います。なぜなら、今の「恵みの日」は、まもなく終わりを告げようとしているからです。

久田 博(吉祥寺キリスト集会)



彼に信頼するものは決して失望させられることはない

吉村 全弘



妻の敬子さんと

私は第二次世界大戦終戦の前日(一九四五年八月十四日)、三人兄弟の末っ子として生まれました。言うなれば最後の戦中生まれとなります。

石川県の能登半島の付け根に近い田舎町で、高校卒業まで育ちました。半農半漁と左官業の出稼ぎで生計を立てる家の多いところで、近所には大相撲で活躍中の遠藤の実家があります。現在でも兄と姉は金沢に住んでいます。

父は、福井と大阪で左官業の会社を経営しており、盆と正月に帰省すると、毎朝、神棚を拝み、毎食事の前には仏壇を拜んで般若心経を唱えていました。毎月一日には高野山にお参りに行っていました。そんな父は仕事熱心で、日本の左官業に大きく貢献をして日左連(日本左官業組合連合会)の副会長を三十年ほど務めました。そして、黄綬褒章、勲五等旭日双光章を受章しました。しかし、私の家族にとって尊敬できる父ではありませんでした。明治生まれの父は、私たち家族以

外に別に二か所の家庭を持っていました。

私は、父の勧めで大学は東京で、建築学科に進みました。六年かかって卒業し、戸田建設に入社することができました。入社して四年後に妻と出会い、結婚することになりました。

入社して十二年ほどが過ぎた頃、琵琶湖大橋近くの研修所の建設現場で、作業所長から、今でいうパワハラを受け、うつ病のようになりました。当時、毎月百時間くらいの残業が一年ほど続き、能力が無いから残業が多いと言われたり、毎朝呼ばれて注意されたりしました。その建物は現在ではホテルとなり、二〇一九年に「近江八幡喜びの集い」の会場として使われました。思い出多い建物です。一九八三年、すでに三人の子供がいましたが、決心して会社を辞めました。

岡山県瀬戸内市牛窓町に家内の両親の助けを得て、「ペンションせとうち」を開業しました。当時、流行っていた「脱サラして自営業」の夢に進んでいきました。

その時の喜びにあふれた話を聞き、翌年一月から岡山キリスト集会に集うことになりました。さらにその翌年、二〇〇六年九月の「広島喜びの集い」で夫婦ともに洗礼の恵みにあずかることができ、兄弟姉妹の仲間入りをさせていただきました。私は六十の齢でイエス様を知ることができました。

私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。

(エペソ 2:3-5)

それから家内の両親もイエス様を信じ救われました。

家内の両親は四人に増えた孫たちのために、愛情を注いでくれて助け手となってくれました。そして三年ほどして、両親と別棟で居することになりました。折しも、バブル景気の追い風を受け、私は自己実現の道へと思うがままに進んで行きました。全国でも有数なペンションとしてマスコミにも幾度となく取り上げられていきました。四人の子供たちに大学教育を施すことを目標に頑張り続けました。

しかし、時代の流れとともにいろいろな困難に出会い、子供たちが後を継ぐ意志もないことから、三十年近く続けた営業でしたが、終止符を打つ決心をしました。

私たち夫婦がキリスト集会と出会ったのは、その少し前の二〇〇五年十二月でした。家内が東京都武蔵野市緑町に住む次女の初出産の手伝いに行き、そこでキリスト集会を知り、ベックさんとお会いできたのです。クリスマス礼拝に初めて集ったのです。家内から

その後、天に召された義理の父は御代田福音センターに納骨されています。また、義理の母(鈴木芳枝)も現在九十一歳になりましたが、イエス様が大好きで、穏やかに平安に守られて私たち夫婦とともに三人で岡山キリスト集会の礼拝に行くのを楽しみにしています。

話が前後しますが、ペンションを閉じるにあたっては、ベックさんにも相談し、ともに祈っていただきました。その折、次の聖書のみことばをいただきました。

彼に信頼する者は、失望させられることがない。

(ローマ 10:11)

実にそのみことばのとおり、主からの奇跡を確信する新しい道が与えられました。私は、イエス様だけに目を留めて歩んで行けば、主は喜んで祝福してくださることを体験させていただきました。

二〇一五年十一月末、娘の結婚式以来、十年振りに

家族全員が我が家に集まる機会が与えられました。長女は国際結婚をし、カナダのトロントに住んでいます。クリスチャンファミリーです。二番目の孫の顔を見せるために帰ってきてくれました。長男は奈良から、次女は東京から、当時独身だった次男も加わり、義理の母も一緒に、親子四世代で久し振りに楽しい交わりの時が持てました。

それから一週間後、私に突然病が与えられました。入浴中に気分が悪くなり、妻とまだカナダに帰国前の長女が私の異変に気付いて、近くの病院に緊急搬送してくれました。診断の結果、思いもよらないことに脳腫瘍とわかりました。その病院は自宅から数分の所にある県内有数の脳の専門病院でした。悪性の五センチ大の脳腫瘍が前頭葉の脳すれすれのところに見つかったのです。

手術をすることが決まり、数日間は自宅待機で、いろいろな準備をする時間がありました。妻は術後どう

四人の子供たちが再び十日後に病院に集まってくれました。手術当日の朝、病室で家族全員が私のために祈ってくれました。海外生活の長かった長男と、まだイエス様を信じ救われていない次男も一緒に祈ってくれたことは、何よりの喜びでした。この病が家族全員の救いのために用いられると思いました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
(使徒 16・31)

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。
(詩篇 37・5)

私は、すべてが主から来ていることだと受け止めることができましたから感謝でした。手術を前にしても、何も思い煩わずに、すべてをイエス様に明け渡すことができました。

なるのかと不安を抱えながら、ドクターから半身不随、言語障害、記憶障害などが残るかもしれないとの説明を受けていました。

入院前日の日曜日、ふだんは各地の集会でメッセージ当番をされている方々が、その日は岡山キリスト集会の礼拝に集っておられて、次々に我が家に駆けつけ、お祈りくださり、主に感謝しました。私は祈りのうちに平安な気持ちになっていきました。不思議とその後、思い煩うことなく主にすべてをゆだねることができました。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。
(ピリピ 4・6～7)

病院の看護師さんが「手術の時に好きなCDをかけますよ」と言ってくれましたので、賛美集「日々の歌」のCDをお願いしました。十時間かかる予定だった手術が八時間ほどで済み、ICUのベットに戻され、麻酔から覚めると、横に妻と集会の内藤さんご夫妻がいました。すぐに内藤さんが祈ってくださいました。私の目から涙が落ちるのが感じられました。生まれ変わったのだこの思いで、主に感謝しました。

その夜、おかゆの夕食が出ましたが、美味しくて全部食べました。それで看護師さんから、「全部食べられる方は珍しいですよ」と言われましたが、次の食事からしばらくはほとんど食べられませんでした。

入院中、大勢の兄弟姉妹が見舞いに来てくれ、一緒に祈ることができました。四人の子供たちも、それぞれに私に寄り添い、祈ってくれました。徳島キリスト集会の野間さんは詩篇23篇のみことを毛筆で書いた額を送ってくれました。これは入院中の私には何より

も力強いみことばでした。

主は私の羊飼ひ。私は乏しい^{とほ}ことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあつても、私はわざわざいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖^{つえ}、それが私の慰めです。私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯^{さかずき}は、あふれています。まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。(詩篇 23・1～6)

一週間ほど毎日リハビリを受け、いろいろな問題に答えたり、運動したり、結構楽しく過ごせました。中でも建物の図面を見せられた後で、思い出して同じ図面

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあつて神があなたがたに望んでおられることです。

(1テサロニケ 5:16～18)

このみことばが与えられ、イエス様が一番望んでおられることを知り、体験することができ、ほんとうに心から祈って感謝しました。「いつも喜んでいなさい。」が与えられ、いつでも喜べるということを体験できました。何も思い煩わないで、すべてをイエス様にゆだねることができました。そして、現在も再発していません。主にただただ、感謝するばかりです。

二〇一六年八月下旬、ベック宣教師が天に召されました。御代田国際福音センターでの葬儀に参列するため、「小松喜びの集い」に行く予定を急きよ変更し、私は妻と共に、久し振りに車を運転して長野県御代田町に向かいました。手術後初めての長距離運転でした。

を描く記憶力の問題は、大学で建築を学び準大手のゼネコンでの設計にも携わっていましたので、得意分野でした。車の運転も術後、二か月ほどは控えてくださいたのことでしたが、リハビリの最終検査で車の運転もOKが出ました。そして退院の時、医師が「病理の結果、悪性の中でも、世界保健機構の指針に照らして、限りなく良性に近い腫瘍でした。私も初めての経験です」と、おっしゃってください、奇跡的に何の障害や後遺症も残らなかったのです。

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむ^{あや}ことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。(1ペテロ 4:12～13)

西軽井沢国際福音センターでベックさんとお別れができた時、今まで数々のお交わりをいただいたことや、その年の六月「岡山喜びの集い」に体調の悪い中を来てくださり、福音を伝えるため最後の最後まで、メッセージしてくださったことなどが思い起こされ、ありがたく、感謝な思いで心があふれました。帰路、金沢や能登の実家にも寄り、一週間ほどかけて約二千キロの運転は、主の守りと導きにより祝福の旅としていただきました。

脳腫瘍の診断を受ける前は、八年ほど介護の仕事に就いていましたが、退院後は退職して時間があり、好きなインターネットでのマージャンゲームに毎日、四、五時間を費やしていました。このことについて、二〇一七年九月、倉敷市児島の家家庭集会で悔い改めが与えられました。ある集会に集う方の体験から、それは偶像礼拝だと教えられ、脱出の方法も教えていただきました。これらを主が喜ばれないことを知り、主の

前に告白して明るみに出し悔い改めることができませんでした。それは決して自分の力ではできないことでした。私の努力からではなく主の一方的なあわれみによってでした。七十歳過ぎてからの悔い改めですから遅すぎたかもしれませんが、今では妻と一緒に毎日、聖書を読み、祈れることは何よりも感謝です。

互いに偽りを言うてはいけません。あなたがたは、古い人をその行ないといっしょに脱ぎ捨てて、新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。

(コロサイ 3:9-10)

あなたの神、主の命令を守って、その道に歩み、主を恐れなさい。あなたの神、主が、あなたを良い地に導き入れようとしておられるからである。(申命記 8:6-7)

主は、私の新しい歩みに希望を与えてくださいました。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

(ローマ 8:28)

もうすぐ私は後期高齢者となりますが、いつまでも子として愛してくださる父親がいます。どんなことがあっても主が最善にしてくださいるので、日々平安に過ごすことができます。何も思い煩わず、すべてをイエス様にゆだねて残りの人生を妻とともに歩んでいきたいと思っています。

最後に詩篇100篇、感謝の賛歌を引用いたします。

全地よ。主に向かって喜びの声をあげよ。喜びをもつ

て主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。知れ。主こそ神。主が、私たちを造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、はいれ。主に感謝し、御名をほめたたえよ。主はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。(詩篇 100:1-5)

次男 鈴木 悠平 (ゆうへい)
母 鈴木 芳枝 (よしえ) 九十一歳
孫男 八人

吉村全弘 (よしむらまさひろ)

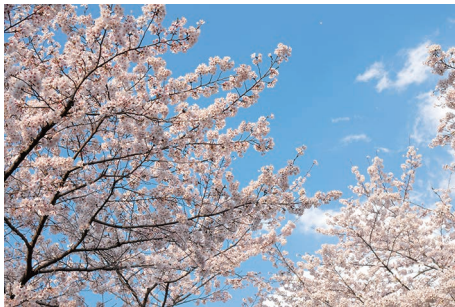
一九四五年八月十四日生まれ、石川県立輪島高校卒、国士館大学工学部建築学科卒、戸田建設株式会社 (十三年勤務)、岡山県牛窓町で「ペンションせとうち」二十八年間経営後、退職

妻 敬子 (のりこ)

長女 ハン エリコ (カナダ、トロント在住)

長男 有弘 (ありひろ)

次女 伊東 彩 (あや)

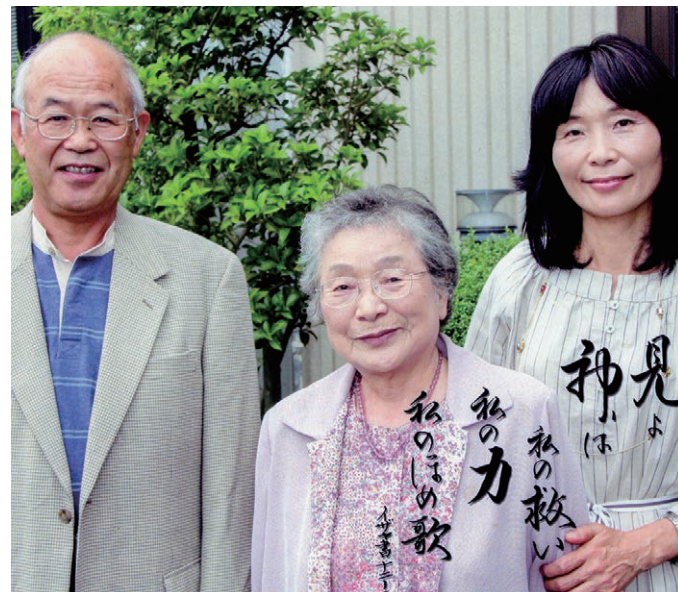


6人の証し

Unser Herr lebt

主は生きておられ、みことばは私を生かします

吉村 敬子



敬子さん(一番右)、夫の全弘さん、お母様の鈴木芳枝さんと

私は、一九五三年神戸市灘区で生まれました。中学、高校は親元を離れ、当時千葉県袖ヶ浦にあって全寮制の学校で学びました。アメリカの宣教師によって建てられた学校の校風に憧れて入学しました。ミッション系で規律の厳しい寮生活で、さまざまな訓練を受け、充実した、かけがえのない六年間を過ごしました。毎日の朝夕の礼拝や授業で聖書を学びました。神戸から遠く千葉に行くことを許してくれた両親には今でも感謝しています。卒業後は実家に帰り教会に行くことはありませんでした。

一九七四年に主人と出会い結婚しました。

それから三十三年後の二〇〇六年に不思議な出会いに導かれて、聖書の御言葉に立つ吉祥寺キリスト集会でベックさんに初めてお会いすることが出来ました。主人と共にイエス様を心から信じて救いの喜びに導かれたのは、主のあわれみであり恵みでした。

その十二年後、二〇一八年二月に突然、私に病が与

えられました。年明けから体調不良が続いていました

が、東京にいる次女が甲状腺ガンの手術を二月に控え、孫たち三人のためにも何としても東京に行くつもりでいたときでした。出発予定の前日、夜中に咳が止まらなくなり呼吸が段々と苦しくなっていました。それまでに、かかりつけ医から抗生剤の薬を次々出されて飲んでいましたが悪くなるばかりでした。主人は苦しそうな私の状態から異変を感じたようでした。翌朝近くの別の病院で、すぐに大きな専門病院に行くようにと紹介されました。

そして岡山大学病院の総合内科に緊急入院することが出来ました。その科の教授の先生が以前から娘と私を診てくださったこともあり、すぐに受け入れてくださいました。検査の結果は間質性肺炎の急性増悪ということでした。肺胞の壁に原因不明の炎症が起き、死に至ることもある完治しない病気でした。私たちには初めて聞く肺炎の名前でしたので、その時はよくわ

からずに案外冷静でした。

それから、呼吸器の専門ドクターの説明では、私の肺の中は今まさに炎で燃え滾っていると言われましたが、自分の肺の中で何が起きているのか理解出来ませんでした。すぐにステロイド剤と抗生剤の点滴と酸素吸入が施されました。もし、このステロイドパルスの治療が効かなければICU(集中治療室)に入ることとなり、その時は意識がなくなるだろう、後一日遅ければ命も危なかったと言われました。この時初めて恐ろしい病気になったのだと理解しました。

その晩から薬の副作用でまったく眠れなくなりました。病室で一人不安に押しつぶされそうでした。主人や年老いた私の母、そして、四人の子供たちのことを思うと涙がとめどなく流れてきました。眠れない中で、家族一人一人が、結婚生活四十五年の間、私を大切に思って愛してくれていたことに気づきました。にもかかわらず、今まで自分勝手な思いを押し通して悲しま

せていたことが、次々に思い起こされ、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。私は、心身共にますます苦しくなっていました。「イエス様、助けてください、私はこのまま死ぬのですか、この先どうなるのですか、私はまだ死にたくないです。イエス様、ごめんなさい、ごめんなさい、私はわがままの塊かたまりでした。私の罪をお赦ゆるしてください」と必死に叫び求めて、イエス様に祈りました。私にはまだ天国に行く準備ができていませんでした。

彼らが叫ぶと、主は聞いてくださる。そして、彼らをそのすべての苦しみから救い出される。主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。
(詩篇 34・17-18)

私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖あがない、すなわち罪の赦ゆるしを受けているのです。これは神

の豊かな恵みによることです。

(エペソ 1・7)

病院では、数人のドクターがチームで見てくださいました。私の担当ドクターはまだ三十歳ぐらいの若い先生でしたが、そのチームリーダーであり、クリスマスチャンドクターでした。緊急入院した木曜日が、その先生の外来担当日だったことで巡り合うことが出来ました。

ある日、病室のテーブルの上に「主は生きておられる」の本が置いてあるのを見つけられて、私がクリスマスチャンだとわかると、ご自分もクリスマスチャンであることを話してくださいました。私との出会いは不思議だとおっしゃって喜んでくださいました。先生の名前は子供のころに召されたお母様が聖書からつけられたことや、その後家族に主がなされた救いのみわざを率直そつちよくに話してくださいました。私は驚くばかりでした。

入院して数日後主人が、徳島キリスト集會に集われ

を頂けました。

また、キリスト集會の証し集「主は生きておられる」、ベックさんが娘の一人であるリンデさんを若くして亡くされた時に書かれた著書「実を結ぶ命」の音声版CD、かつて集會に集われた春木美智子さんが病床時に書かれた冊子「わが恵み、汝なんじに足れり」、また主人が初めてみことばを取り次いだメッセージを録音したCDなどを聞いて下さり、感想を伝えてくださいました。こうして、主にあつて、心を通わせていただけたことにより、その後の治療の期間が私の心と体に恵みの時となっていました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

(イザヤ 41・10)

る野間さんがみことばを書いて作られた木の額がくを持っ
て来てくれました。これが病室にあるときと用いられるからと、詩篇23篇のみことばを置いていつてくれました。その日先生が部屋に回診に入ってこられると、なぜだか真っ先に額に目を止められて指でさし、声に出して読まれたのです。

『たとい、死の陰かげの谷を歩くことがあつても、私はわざわざいを恐れません。あなたが私と共におられますから。』僕はこの箇所好きだなあ、だって大切なのはこれだけでしょう」と優しく語りかけてくださいました。詩篇23篇を読まれたことで、私は先生が本当にイエス様を信じておられる方で、この出会いは主が与えてくださったものと確信出来ました。嬉うれしくて、心の深いところから喜びがこみ上げて感謝しました。そして、心配しないで先生を信頼して、すべてを主にお任せすれば良いのだとの気持ちになりました。毎日様子を見に来てくださり、時には主人と一緒にイエス様にある交わり

まことに、神は私を助ける方、主は私のいのちをささえる方です。
(詩篇 54・4)

入院中のある晩、カナダのトロントに住む長女からメールが届きました。

恐れるな。私があなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡る時も、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしは、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。
(イザヤ 43・1～3)

実はこの箇所は東京に住む次女が、数年前にメールアドレスにとプレゼントしてくれたものでした。いつも身に付けていましたが、あらためて、特別なみこと

イエス様に救われている喜びです。

神よ。まことに、あなたは私たちを調べ、銀を精錬するのように、私たちを練られました。

…私たちは、火の中を通り、水の中を通りました。しかし、あなたは豊かな所へ私たちを連れ出されました。

(詩篇 66・10、12)

恐れないでただ信じていなさい。
(マルコ 5・36)

娘たちから送ってきたイザヤ書43章2節のみことばによって、私は主からの慰めを受けたことを先生にお話ししました。先生は静かにうなずいて聞いておられました。まだ息苦しさがある中で、私がこの箇所を読むことが出来たときに一緒に寄り添ってくださったことは、今でも忘れることができません。完治しない病気をかかえながら、いつか、この病気で死ぬかもしれ

ばとして受け取りました。

入院当初、呼吸器専門ドクターからの説明で、私の肺の中は炎で燃え滾っていると言われ、ステロイドバルス療法を行ったので、その炎は消火されてはいても、すでに燃えかすとなっているところがあるのかもしれないと思っていました。この、「火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。」のみことばを読んだとき、すぐに、主が「あなたを助け守る」とおっしゃって下さっているとわかりました。その日、娘たちに泣きながら喜びを伝えました。「お母さん良かったね！ イエス様はお母さんの命を守ってくださいるから、この病気で死にません！」と力強く励ましてくれました。医学的には完治など考えられない状態でしたが、心は平安に満たされていました。娘や息子たちとはどんなに離れていても、世界のどこに住んでも、みことばにあって一つにされ祈られていることに感謝しました。心一つに祈り合えるのは、家族が皆、

ないと思うと現実を受け止めることが出来ず、思い煩いの中で生きる希望を失いかけていました。けれども、みことばを中心とした交わりと、送られてくるみことばと背後のたくさんの祈りに支えられて、主が豊かに恵みを降り注いでくださいました。

また集会に集うある方は、詩篇23篇を泣きながら読んで私の為に祈ってくれました。そして「もうちょっとしたら再臨が来るのだからその時に一緒に天国に行けるよう信じてます。どうか、病室でイエス様に用いられますように、イエス様の香りを放って過ごせますようにと祈っています」とメールを送ってくださいました。今までは、どこへでも自由に動き回り、思い立てばすぐに行動に移したい性格でしたが、自由を無くし、何もできなくなつて、ただ入院治療を受けている身でこれから何が出来るのでしょうか。そうした時に、この方の祈りで私は前を向いて生きる希望が与えられました。それから毎日、「こんな私でも主人と一緒に用いて

ほしいのです」と祈りました。毎日来てくださる医学生の方、看護科の実修生、夜勤の看護師さん、また同室となった患者さんと不思議な出会いが次々に用意されました。私はイエス様を信じることを子供のよう喜んで素直にお話しすることが出来ました。どの方も興味深く真剣に寄り添って聞いてくれました。ある医学部の女子学生さんは「初めて聞く話だけれど大切なことを聞くことが出来て良かったです。こんなうれしいことはないです」と涙を浮かべて喜んでくださいました。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

(ローマ 8・28)

実際はつらく苦しく、たくさん涙を流してきました

持ちは明るくなり、「イエス様に信頼するなら失望させられない」ことを話すと、皆さんは喜んで聞いてくださいました。そのひとときは嬉しくて楽しく感謝することばかりでした。

三月初旬、梅が満開になったころ私の体調は驚くばかりに良くなってゆき、無事に退院することが出来ました。その時は、ステロイドのプレドニンの薬がよく効いたとのことで、こんなに良くなって退院できた人は初めてだと言われました。帰宅後、二週間後に再燃しましたが、先生が薬を慎重にコントロールして下さり、自宅で療養することが出来ました。

あれから約一年の間には色々なことがありました。何より主人の支えがなくては今の私はありません。家事、買い物、食事作りを喜んで全面的に担ってくれました。私の体調が悪く、呼吸が苦しくなり、精神的に追い詰められて、一時期は水や食事も飲み込みにくくなった時、夜に、このまま無事に朝を迎えられるか不

たが、まさに、このみことば通りだったと思います。自分の無力さを感じたときから信仰は始まるのだと思いました。

また、集会に集う別な方からの手紙には「主は生きておられ、すべてにおいて最善をされることを知ることが出来ました。いまなお病状の完全なる回復がなされておられぬ由、主の計り知れぬご計画は知る由もございません。ただ、知り得ることはローマ人への手紙8章28節にあるごとく、主は主を愛する者に対して最善を用意してくださることを、信仰を持って確信できることです。引き続き祈らせて頂きます。」と書かれ、またイザヤ書43章1〜4節のみことばを書かれた額とともに送ってくださいました。今もそのみことばは詩篇23篇と共に大切に寝室に置いています。

二月からの一か月入院中には、キリスト集会に集う兄弟姉妹や友人たちがよく交わりに来ては一緒に祈ってくださいました。病気の不安から解放されて気

安だと訴えると、主人は「救急車はすぐに来るよ、消防署は近いからね。心配無用」と言って、何も思い煩わないで主にゆだねようと毎晩一緒にイエス様に祈ってくれました。目が覚めると新しい朝を平安の内に迎えることができ、感謝しました。そして、二人で朝夕に聖書を読むことは何より楽しみになりました。毎日、その日、その時に必要なみことばが次々と与えられました。それによって、慰められ、心と体は平安に守られていました。今では聖書のみことばが弱さの中で、なくてはならないものとなっています。

まことに、みことばは私を生かします。(詩篇 119:50)

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。(詩篇 119:105)

苦しみの最中(なか)にあつて避け所を求めて祈れば、聖書

のみことばは私の渴いた心に命の泉として流れ込んできました。二人で祈ることは、生きていく上で呼吸をするように必要となっていました。

その後、肺の炎症は月単位で消えていきました。最初の先生から信頼できる先生へと引き継がれ、特発性間質肺炎の経過からくる過敏性肺炎が原因のようだとわかりました。ステロイドをはじめ、十数種類の薬や眠剤も必要なくなり今は二種類だけになりました。定期検査では、なぜだかわからないが肺は完治の状態で、再燃の可能性がゼロというわけではないが、心配しすぎず、自由に過ごし行動範囲を広げていくように、「またカナダにも東京にも行けますよ」と暖かく見守り励ましていただいています。

二〇一八年九月ごろから、新たに背柱背筋、四肢筋力が衰えて全身が重くふらつき歩行障害が現れてきました。薬の副作用からか、原因は未だはつきりしていません。ステロイド・ミオパチーとの診断でした。今度は

は動くのに体が不自由になって、時々、杖を使つて歩いています。

二〇一九年一月からは病院に週一回、リハビリに通い、少しずつ体力もついてきました。冬の間、折れそうになっていた心も体も春の訪れとともに上向きになってきました。私は以前のように落ち込むこともなく、イエス様に支えられて、希望を持って歩むことが出来ています。この先、どこまで命が与えられるか分かりませんが、イエス様に信頼した時に、これらのことも、全て責任をもって運んでくださると思いが与えられ、平安になりました。

東京の次女の体調も、主のあわれみによつて守られ、必要な助けをいただいて、すっかり回復することができました。背後で皆様が娘の為に祈り下さいましたことはありがたい事です。

あなたは私の助けでした。御翼の陰で、私は喜び歌い

ます。私のたましいは、あなたにすがり、あなたの右の手は、私をささえてくださいます。(詩篇 63・7・8)

を自由にします。

(ヨハネ 8・32)

あなたの家、あなたの家族のところに帰り、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい。

(マルコ 5・19)

もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る。...

(ヨハネ 11・40)

吉村敬子(よしむらのりこ)

一九五三年神戸市灘区生まれ、日本三育学院 中、高卒業、神戸海星女子学院短期大学卒業、岡山市中区湊在住

そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがた

夫 吉村全弘(まさひろ)

長女 ハン エリコ
 長男 吉村 有弘（ありひろ）
 次女 伊東 彩（あや）
 次男 鈴木 悠平（ゆうへい）
 母 鈴木 芳枝（よしえ） 九十一歳
 孫 八人（男）



主の遠大なる御計画

館 芳博



妻の幸子さんと

私は、一九四七年十二月一日に東京で生まれました。高校の時に神奈川県相模原市にある米軍座間ベースキャンプに駐在していた軍医さんの家族と仲良くなり、月に二度程、週末を利用してこの座間ベースキャンプを訪問し、米軍基地での彼らの生活を垣間見ることが出来ました。広い芝生の庭と家の中は広く冷暖房完備された快適な生活空間、それらはまさにテレビで見ていたアメリカドラマそのものであり、当時の日本の生活スタイルとは全くの別世界でした。しかし、この快適な空間からはもう一つの世界も見ることが出来ました。このときはまさにベトナム戦争の真っただ中であり、ベトナムから一時休暇で基地に戻ってくる若い兵士が青い芝生の上で、マリファナを吸いながら焦燥（しょうそう）しきっている姿も印象に残っております。私より二、三歳年上で命をかけて従軍している若者がおり、自分が同じ境遇であつたらどうするのだろうか？ 命をかけて国のために戦うことが出来るのか？ このとき初め

て命について自問自答したことを覚えております。しかし、当然十七歳の自分には回答が出る訳もありませんでした。

こうした交流が二年間程続き、軍医一家が帰国しましたが、アメリカでの生活に強いあこがれを抱き、若いうちに必ずアメリカに移住すると強い決心をしたことを今も鮮明に覚えております。

都内の大学に進み、勉強は二の次、サークル活動に夢中になった四年間でしたが、アメリカでの生活の夢だけは不思議に消えず、むしろ更に強まって大学卒業後はアメリカに住むことを勝手に決めておりました。周りの友人が大学四年から就活を始め、夏前にはほぼ就職先が決まっており、将来の具体的な歩みを決めていく中で正直焦ってはおりましたが、どうしても日本で働く気が起きず、結局就活など一切せずに時が過ぎて行きました。具体的な計画もなく、只、アメリカに行くことのみを夢みて一九七一年三月末に大学を卒業し

ました。卒業後は、アメリカ、もしくはカナダに行くための準備を開始するために、各大使館を訪問して、どうしたら永住権を取得できるか情報収集しましたが、そのたびに、全く永住権などもらえるチャンスがないことに気づかされて焦りました。しかしながら夢は捨てきれず大学卒業の八ヶ月後、何の具体的な計画もないまま、見切り発車で思い切ってカナダに出発しました。

一九七一年十一月二八日にカナダ西海岸のバンクーバーに到着しました。アメリカ行きを最優先で考えておりましたが、この当時まだアメリカには徴兵制度があり、日本人といえども永住権取得の際、徴兵されれば志願するかどうか取得の大きな決め手となるなどの情報もあったので、アメリカの知人からは、渡米は慎重に検討するようにとの連絡がありました。こうして、あこがれのアメリカより安全なカナダ行きに変更しました。

バンクーバー到着後、高校時代より知っていたカナ

ダ人の知人宅に居候を始め、八ヶ月程お邪魔している間に移民権（永住権）の取得に駆け回ると同時にバンクーバーの素晴らしい自然と豊かな生活環境を謳歌する時間もいただきました。永住権を申請したのち、移民局の担当官とはなんと五ヶ月の間に十一回程の面接を繰り返しましたが、日本での仕事の経験がない上、特別な技術も持っていなかったので、全く対象外であり、面接のたびに許可は出せないとのやり取りで時間が過ぎていきました。もうこれ以上の面接は意味ないと担当官からの最後の面談日を言い渡されました。担当官が私に最後に言ったことは、将来いかにカナダの国のために役に立つことができるかを証明しろとの無理難題でした。もはや崖っぷちの状態で、このまま日本に帰国しなければならぬかも知れない状況に追い込まれた時に、カナダ人の友人よりブリテッシュコロンビア州立大学の教授と話したらどうかとの助言をもらい、大学教授との面談にこぎ着けました。自分のカ

ナダに住みたいとの強い気持ちを三時間程訴え、話を聞いてもらいました。どうしてか今でもよくわかりませんが、全く面識のない大学教授が真剣に話を聞いてくださり、最後に移民局の担当官に手紙を書いてくれると約束してくださいました。

二週間後、移民局担当官との最後の面談日になり、半分以上、いやむしろほぼあきらめかけておりましたが、担当官からは、許可に必要なポイントの半分にも満たないが大学教授の手紙が最終決定の要因となったとの説明があり、特例で移民権を出すと決定してくれました。担当官もこのような判定は今まででしたこともなく、明確に許可する根拠はないと認めておりました。その後担当官より、大学教授の手紙のコピーを頂きました。内容は将来ある若者がカナダへの移住を希望しており、こうした若い力を十分活用してカナダの国を育てていくべきだとの内容でした。何と便箋五枚程にびっしりと彼の考えが書き綴ってありました。こうし

た手紙を書いてくれる教授、そしてこの手紙を最終決定の大きな要因として認めてくれた移民局の担当官のように、個々の人間に真正面から向き合い柔軟な考えを持つてくれたお役人に感謝するとともに、この懐の深い国であれば自分も自由に生活できると実感しました。ほぼあきらめていたカナダ移住計画がスタートしたのは日本をたつてから五ヶ月後の一九七二年五月九日でした。

わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。(エレミヤ 1:5)

このときは神の存在に全く否定的な人間であり、自分には幸運の星がついている、更に自分の粘り勝ちで、交渉力の結果と誇らしげに思っておりましたが、このとき既にイエス様のご計画が始まっていました。イエ

ス様を知ってから、この御言葉はわたしにとって主の愛そのものであり、このようなどうしようもないわたし個人を生まれる前からご存知であり、主との特別な関係を約束してくださり、永遠の恵みを頂けたと確信できるみことばでした。

その後、総合商社である住友商事のカナダ会社にて鉄鋼製品の輸入販売に携わりました。当初は、職歴をつけるための腰掛けのつもりで日系の企業に入ったものの、実際には仕事が想像以上にダイナミックであり、生き甲斐を感じるものであることを実感しました。その後は、四十年に渡り、マーケティング、営業販売でカナダ国内、東南アジア諸国、欧州等の訪問、鉄鋼メーカーの新規開拓にはげみました。二十七歳で大きな商権をもつ鋼管部の責任をもたされました。日本では考えられない職責で逆に言えば、若くして大変な責任を持たされ毎日が戦いであり、家庭を顧みる余裕は全くないと言っても過言ではありませんでした。五十歳近くに

なつてからは日本のビジネスは激減しましたが、その

一方で東南アジアや中国の鉄鋼メーカーとのビジネスが拡大し、東南アジアや中国への海外出張は二ヶ月おきとなつて、頻繁に家を空けるような状況が長く続きました。更にこうした、中国や東南アジアとのビジネスでは、従来の日本のビジネスの通念は全く通用せず、商習慣の違いによる問題、品質問題、クレーム処理問題、その他色々問題が多発して、どれをとつてもすんなり解決できるような事案はありませんでした。特に私のビジネス形態はすべての結果が自分に帰する個人商店のようなもので、根本は自分が全てであり、成功も失敗も自己責任、日本流の一般的なサラリーマンとは違う北米スタイルのやり方であり、やりがいがある一方、かなり厳しい事態に陥ることもありましたが、こうした苦しい状況を一人で抱えることも暫しありました。ところが、家の中で明るく振る舞ってくれる妻の幸子や娘の真里子の存在が私にとって本当に大きな安らぎになつ

ておりました。

学生時代よりつき合っていた幸子とは一九七三年夏に結婚し、彼女も持ち前の明るい、物怖じしない性格で、仕事を持ち、難産の末に一九八一年に生まれた娘真里子を育てながら、茶道などの趣味を幅広くもつて人生を楽しんでおりました。ただ、四十歳半ばより股関節の痛みから、思うように活動できなくなったため、仕事や趣味の茶道もあきらめて、色々苦しい時期であつたと思います。

そのような時期に真里子と幸子が一九九七年ベックさんを通してイエス様と出会ったことで、二人が一気に明るくなり、喜びをもつて日々生活するようになったことを垣間見るようになりました。二人は、いつもイエス様の話をしており、喜んでおりました。イエス様の話、さらにドイツ人宣教師ベックさんの話など、わたしには全くわからない世界でありながらも、二人が楽しくいつもイエス様の話をして折り合っていること

は決して不愉快ではありませんでした。同時に、日本から集会の皆さんが福音を伝えるためバンクーバーに来られ、我が家を訪れてイエス様が救い主であることを語って下さいましたが、こちらは仕事で疲れているのにお付き合ひもさせられたりで、うんざりしたことが多々ありました。どうしても私にとって受け入れられなかったことは、イエス様が全てのご計画をもち、すべてを支配しており、私がしてきたすべてはイエス様の御力でなされたことだと強調されることでした。私が苦勞して築いてきたビジネスや私生活を全否定されたと思わされたのです。中国や東南アジアの環境の悪い地方に向いて、とんでもないホテルに滞在し、慣れない食事や飲みたくない酒なども我慢して新しい鉄鋼メーカーの開拓に精力を使っていたこと、それによって新規ビジネスを立ち上げ、新しい大きな商権を築いてきたこと、これら全てを「イエス様がしてくれた」と自己否定につながることをどうして信じる

ことが出来るか、と強く反感をもったことを覚えております。

一九九八年十二月二十三日、日本からこられた集会の皆さんやバンクーバーキリスト集会の皆さんが我が家で共に食事をする機会がありました。またもや同じように食事中にイエス・キリストの話で盛り上がりつつありました。私は、「自分は無神論者。自分だけを信じ、自分の力を信じ生きてきました。私のことはおかまもなく、いい加減にこの話はやめましょう。この目でイエス様を見ることが出来れば信じましょう」と日本から来られた集会の皆さんにある意味では怒りをもって啖呵を切っておりました。このとき、ある方に、「死んでから後悔するわよ。今のうちにイエス様を信じてみてはいかがですか」と言われたことをはつきりと覚えております。

一九九八年十二月二十四日クリスマスイブの日、車で後ろから追突され、車の下敷きになる事故に遭いまし

た。この日は雪が降った翌日であり道路には雪がまだたくさん残っておりまして。意識を失って、気を取り戻したときには、顔面の周りの雪が血で染まっており、死ぬかもしれない恐怖を感じました。車の下敷きになったときに鼻を強打して血が出ていたのです。パトカー二台、救急車、消防救助車が出動し、道路を塞いで三十分程かけて車の下から引き出してくれました。このときは意識があったりなくなったりで、酸素ボンベをつけてもらった記憶があります。直ぐに、緊急病院に運ばれましたが、診断結果は、骨折も、打撲もなく、鼻の上と太ももにかすり傷があっただけで、奇跡的にその日のうちに帰宅出来ました。この事故は、まさに日本の集会の皆さんに啖呵をきった次の日の出来事でした。

翌日、十二月二五日クリスマスの朝、シャワーを浴びながら、車の下敷きになった後遺症などの痛みも全くなく、昨日の事故はいったい何だったのかと自問自

答を繰り返しているときに、この事故もイエス様のご計画であったことに「あつ」と気づかされ、シャワーを浴びながら涙が止まらなかったことを今でも鮮明に覚えております。この後の朝食の時、幸子や真里子の前で、初めて祈りました。どのようなお祈りをしたか全く覚えておりませんが、このときにイエス様が生きて働いていることがはつきりと分かりました。澄み切った空気、今まで感じたことのない静寂さ、なんだかわからない清々しき、そして主のご計画の中の事故であったこと、私を新しく生まれ変わらせるための歩みの一歩であったこと、そして今まで味わったことのない透明な時間でした。この目では見えませんが、私のためにイエス様が生きて働いてくださる事を実感できた貴重な一時でした。

まことに、神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする。

あなたは、私のいのちを死から、まことに私の足を、つまずきから、救い出してくださいました。それは、私が、いのちの光のうちに、神の御前を歩むためでした。

(詩篇 56・13)

この二つの聖句を読むたびに、イエス様を拒み続けたでしょうもない私でさえも、主が捜し出し、一生面倒を見てくれると約束してくださったことを覚えました。それも主の全能の御力で、これほど力強いことはないと思いました。こうして、親子三人でのクリスチャン生活がスタートしました。そして、一九九九年五月の第二回のバンクーバー喜びの集いで受洗しました。

主はご自分のすべての道において正しく、またすべてのみわざにおいて恵み深い。主を呼び求める者すべて、ま

ことをもって主を呼び求める者すべてに主は近くあられる。また主を恐れる者の願いをかなえ、彼らの叫びを聞いて、救われる。すべて主を愛する者は主が守られる。

(詩篇 145・17～20)

イエス様に新しい命を頂いて二十年経ちます。毎週日曜日には北米、欧州二十三箇所を電話回線で繋いだ日曜礼拝、福音集会に参加しています。バンクーバーキリスト集会の皆さんと共に祈ることの大切さを教えていただき、さらに多くの聖書の御言葉をいただける恵みに満ちた時間を、世界中に住んでいる集会の皆さんと共有出来ることが本当に感謝です。集会に現在集っている方は十四名ほどです。ほとんどの皆さんは長い北米生活をしている方ばかりです。日本を離れ長い間バンクーバーに住まれるまでに、いろいろな背景や経緯があったと思います。私のように計画もなく、ただ行きたい、住みたいといった単純な背景の方や、

現地で結婚なさって住んでおられる方、仕事で北米に来てそのまま住んでしまった方もおられます。出身地も違えば育った環境もまるで違う一人一人を、主イエス様がこのバンクーバーの地に、主にある兄弟姉妹と与えるべく呼び寄せてくれました。この二十年の間一人一人の兄弟姉妹がイエス様を通して、病氣やさまざまな試練を体験している姿を見させていただきました。私も仕事上で自分の計画とは全く逆方向の道を歩まされ何度もイエス様を受け入れ難いと抵抗したこともあり

を日々見る中で、「主は本当に生きておられる、一人一人の全てをご存知であり、主はいつくしみ深い神であり、必ず守ってくれる」と確信を持つことができます。

主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに。主の救いを黙って待つのは良い。

(哀歌 3・25～26)

りますが、ほかの集会の皆さんと同様に、イエス様の恵みによって新たな力をいただき、負いきれないような重荷を持ったとしてもイエス様が必ず働いてくださることを確信できるようになりました。妻幸子も肉体には数多くの痛みを抱えながら、この痛みがあったからこそイエス様を愛の神と確信し、この痛み一つ一つをイエス様からの贈り物として毎日感謝し、賛美しております。こうした集会の皆さんの試練や妻の肉の痛み

主は、いつまでも見放してはおられない。たとい悩みを受けても、主は、その豊かな恵みによって、あわれんでくださる。主は人の子らを、ただ苦しめ悩まそうとは、思っておられない。

(哀歌 3・31～33)

肉の思いが消えることのないどうしようもない私ですが、これからもイエス様のご計画のみが成り、そしてその御計画が最善であることをこの証しを書くことで改めて確信することができました。イエス様に

肉の思いが消えることのないどうしようもない私ですが、これからもイエス様のご計画のみが成り、そしてその御計画が最善であることをこの証しを書くことで改めて確信することができました。イエス様に

全てをゆだね、これからも主と共に歩んでいきたい
と思います。

人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごと
だけが成る。
(箴言 19・21)

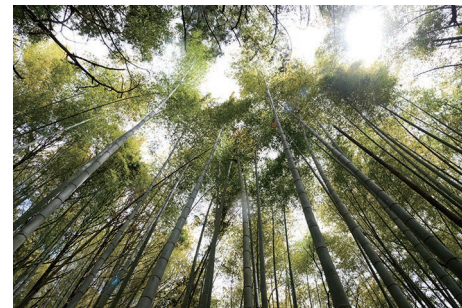
人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩
みを確かにするのは主である。
(箴言 16・9)

館 芳博(たちよしひろ)

一九四七年十二月一日生まれ、立教大学社会学部
卒、住友商事カナダ株式会社、二〇一二年退職、現在、
YT Steel LTD 在職、カナダ プリティッシュコロン
ビア州 ウェストバンクーバー在住

妻 幸子(さちこ)

長女 真里子
長女婿 ダグラス レイアス



「アバ、父。」

館 幸子

四歳の時に、私の居場所はどこではないと不思議な
思いが与えられました。私は神社やお寺で手を合わせ
ても建物の中には神様、仏様はいない。人はなぜ生き
るのか。永遠、真理という言葉はあるが、それらは一体
どこにあるのだろうと自分では解決できない思いを抱
えたまま育ちました。今振り返るとずっとイエス様を
探し求めていたのだと思います。

地上では旅人であり寄留者であることを告白してい
たのです。
(ヘブル 11・13)

木で細工する者は、測りなわで測り、朱で輪郭をと
り、かなで削り、コンパスで線を引き、人の形に造り、人
間の美しい姿に仕上げ、神殿に安置する。
(イザヤ 44・13)

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。



幸子さん(後列右から二番目)、BSFの友人と

高校受験、大学受験の時には、学校では努力せよ、頑張れと叱咤^{しつた}激励され、自己実現のために競争相手となった友人たちを蹴落^{けお}としてでも合格しなければならぬ現実、生きて行くのは大変と思ひ何か頼れるものを求めていました。後に頼れるお方は神様以外にはおられないことを知り、イエス様と共に歩む人生を与えられたことは一番の幸いです。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂^とげてくださる。(詩篇 37・5)

神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私は決して、ゆるがされない。(詩篇 62・2)

大学で出会った主人と、卒業する頃には結婚を考え

るようになりました。主人は、日本では働きたくない、カナダで生活するとの決意がかたく、私はそれもよしと受け入れましたが、両親にとっては受け入れがたいものでした。それでも学生時代に、互いの家を行き来している間に母親同士が大の仲良しになっていたのです、あの親の子供だから信頼しようと、婚約が成立しました。しかし私が出発する一週間前から母は毎日涙を流して私のために荷造りをし、羽田空港での別れの時は泣き崩れ、父は顔を歪^{ゆが}め石像のように立ち尽くしてしまいました。両親をこれほど悲しませ申し訳ないと胸が痛みましたが、ここまで来て後戻りはできないと真つ直ぐ搭乗口へと歩きながら、絶対に心配はかけないとい心^{こころ}に誓ってカナダに向かいました。

カナダでの生活は美しいバンクーバーの景色と環境の良さに助けられ、人に恵まれ順調なスタートで両親も安心していました。生活は落ち着いているもの

の、習慣の違いや言葉の壁に戸惑いがあったこともあり、子供を育てる覚悟ができるまでに七年を要しました。出産は難産で、分娩室に向かう途中、胎児^{たにい}の心拍がなくなり急きよ手術室へと方向転換。子供は直ぐに無事取り上げられましたが、私の手術は二時間半に及ぶものでした。翌日病室に私と娘を見舞って下さった担当医師は「命が危なかったが、なんとか母子共に助ける事が出来て本当に良かった。神様があなた方親子を生かしたかったですね」と言ってく下さいました。

私たちが減びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。(哀歌 3・22)

四十代半ばに右股関節が痛み、動けなくなっていました。私は先天性股関節脱臼^{だつびう}で生まれたのですが、両親と祖母がなんとか人並みに歩けるようにしたいと必死の思いで通院と看護をしてくれたお陰で、疲れ

ると右脚^{みぎあし}の付け根が痛むことを除いては普通に生活できるようになっていました。そのため、歩行が困難になった時はショックでした。働き盛りの主人と中学生の娘の足手まといになってはいけない、この先どうなるのだろうと大きな不安がのしかかりました。朝二人を送り出すと毎日居間のソファーに座り大きな窓の外に広がる景色をみて過ごす日々でしたが、ある日、緑に覆^{おお}われた山々、青い空を刻々と形を変え渡って行く雲風^{ふう}にそよぐ木々の美しさに、これらは偶然出来たものではない、造られた神がおられると気づきました。こうして創造主であられる神様にお会いしたもののイエス様にたどりつくのには更に時間がかかりました。

私は山に向かつて目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。(詩篇 121・1～2)

当時発足して間もないバンクーバー集会から、我家に娘を通してキリスト集会の証し集「光よあれ」が運ばれてきました。表紙に並んだ輝く笑顔に引きつけられて、早速読み始めると、学歴、職歴、家族構成まで堂々と書き、イエス様の素晴らしさを語られていることに感銘を受け、夢中で全巻を読み終えました。イエス様を信じ切つて、天国をめざして歩むなど、そんな生き方があるのか。私も同じように信じられるのだろうか。もしキリスト教徒になるなどと言ったら母は、二度捨てられたと泣くのではないだろうかと思ひ、もう一度仏教を見直してみようと「日本の宗教のすべて」という本を手に入れて勉強することにしました。

本に書かれていたことは、日本史や倫理で習った内容でがっかりしましたが、一つだけ心に残った写真がありました。倫理の教科書にも出ていましたが、東北地方の土着の信仰で、極楽浄土をめざして袈裟に身を包み、数珠を手に地中深く掘った小さな空間に正座

方です」と答えました。

「どくろ」と呼ばれている所に来ると、そこで彼らは、イエスと犯罪人とを十字架につけた。(ルカ 23・33)

この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。(コロサイ 1・14)

こうしてイエス様と出会ったものの、オウム真理教のサリン事件のあとだったこともあり、宗教は怖いからどう信仰に踏み出せば良いものかと躊躇していました。そんな時、バンクーバーキリスト集会に集っている方から、日本からベックさんという宣教師が来られるので会ってみませんかとお誘いを頂き、娘と出かけたところ、ベックさんが温かい笑顔で迎えてくださいました。ベックさんが私たちに紹介しようとしているイエス様は本当の神様であり、信じて良いのだと

して経を死ぬまで唱え続けるのです。地上とは節をくり抜いた竹でつながっていて、村人は竹の管に耳をあてて、声が途絶えるのを待ってから掘り出してミイラ化し、寺に祭つて仏として拝むという信仰です。写真で見たミイラは、袈裟を着て苦しみ歪めた顔と爪を立てた指とが痛々しくみにくいものでした。これは仏様ではなく人間ではないか。土に返してあげれば良いのにも思いました。この想いが引き金となり、大学のキャンパスにあつたチャペルに一度だけ足を踏み入れた時のことを思い出しました。正面に十字架にかかつて死んだイエス様が飾られており、それを見て、苦しんで死んだ姿、それも裸でなんとひどい、せめて衣をかけてあげれば良いのにも思つたことです。似たようなことを思つたことがあると気づいたその時「どちらが神だ」と言う声を聞きました。一方は自分自身の成仏のため、もう一方は全人類の罪を贖うため十字架にかかり死んだ神の子です。私はイエス様を指して「この

二人同時に信じて救われました。親子で嬉し涙を流し喜び合いました。娘と私との間での「イエス様記念日」一九九七年九月二日の出来事です。この日から二人でイエス様の話ばかりしていたので、とうとう怒り出した主人から、もう十分聞いたからやめてくれ、と言われる始末でした。このことで反省をし、この時から真剣に主人の救いを祈るようになりました。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。(マタイ 7・7)

翌年の一九九八年六月七日、バンクーバーで初めて行なわれた喜びの集いに参加し、日曜礼拝の後に娘と一緒に受洗の恵みにあずかりました。六人の受洗者とともに白い洗礼服を着て裸足で、日本や北米各地から集われている大勢の方々の前に並んで賛美の歌で祝

福されているうちに私は怖くなりました。荒布をまとい腰に縄を巻かれ裸足で引きずり出され、これから罪を暴かれ刑場に引かれていくようで、隣に立つ娘に怖いからやめたいと助けを求めると、大丈夫としつかり手を握ってくれたので、落ち着くことができました。真つ青な空の下、サイモンフレーザー大学キャンパスの芝生の上にタンクに水を入れて作った臨時の洗礼槽。ベックさんが先に水に入られ、私が続きました。お祈りの後、促されるままにあお向けに水中に沈み、目を開けると水の中は光が一杯。暖かい水の中で立ち上がる体勢をとると羊水に浮かぶ胎児の形になりました。ああ、神様の胎の中は光に満ちあふれ、羊水は暖かく心地よい。それと比べ、母の胎内は真つ暗だったのだらうと思ひながら水から顔を出すと全てが光り輝いていました。私は最愛の娘とともに、新しいのちを頂き神の子とされました。

様に対する恐れと感謝の思いが心に満ちあふれました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわざいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

(エレミヤ 29・11)

この年の九月に「ドイツ喜びの集い」に主人と導かれました。主人は到着直後、近所にゴルフ場を見つけたので毎日ゴルフに行く、一切集会には出席しないと言い放ちましたが、賛美の歌の美しさに惹かれて福音集会と礼拝にすべて出席しただけでなく、ベックさんにも質問する程、イエス様に引き寄せられていました。十二月には東京から主人に福音を伝えるために三人の兄弟姉妹が我が家を訪れてお話をして下さいました。ところが主人は頑なで聞く耳を持たなかったため、

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなくキリストが私のうちに生きておられるのです。

(ガラテヤ 2・20)

イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によつて生まれたのです。

(1ヨハネ 5・1)

わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。

(ヨハネ 8・12)

ベック兄のご配慮で一番初めに洗礼を受けさせて頂き、すぐに着替え、娘の受洗に立ち会い、みことばを読み、お祈りをすることができました。この時に、出産の翌日の「神様はあなたがた親子を生かしたかったのですね」との医師の言葉がよみがえってきました。すべてはイエス様のご計画であつたことに気づかされ、神

がっかりしました。兄弟姉妹が帰国された二十四日クリスマスイブ、主人は大雪で凍りついた道路上で車の下敷きになる事故に遭い、救急病院に搬送されました。ところが、事故現場の物々しさとは裏腹に、擦り傷に赤チンを塗っただけで数時間後には退院することができました。このことを通して、主人は、翌日二十五日にイエス様を受け入れたのです。こうして、クリスマス朝にイエス様は我が家をクリスチャンファミリーとしてくださいました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族救われます。

(使徒 16・31)

イエス様と出会うきっかけとなった歩行困難の原因は、子宮筋腫による出血のための極度の貧血と股関節の軟骨が擦り減って関節炎を起こしている事でした。子宮の摘出手術を受けると体調は回復し、右股関節の

痛みも軽くなったものの、その後関節炎は悪化の一途を辿りました。

そのため、まず趣味の茶道を諦めなければなりません。茶道は外国に住む私にとって心の拠り所でしたから、やめざるをえない状況に追い込まれたことは辛いことでしたが、後になって聖書にあるみことばを見つけて、私は天に属する者なのだと、「日本か、カナダか」とのこだわりから解放され外国で生きるのが楽になりました。次のみことばです。

私たちの国籍は天にあります。(ピリピ 3・20)

一方、試練はこれからでした。歩行を少しでも楽にするために履ける靴が極端に制限されたことで、お洒落もできなくなりました。この頃にイエス様に救われたことで、イエス様は私には必要のないものだから取り上げられるのだと自分に言い聞かせるのですが、主

人の仕事柄パーティーに出席する事が多く、特にクリスマスシーズンには頻繁で、着るものの履くものが悩みとなりました。なんとか身支度が整っても足を引きずって出かける自分が惨めでした。そのうち見かけなどどうでも良いと思うほどに痛みが増し、やっと気がつきました。

私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。(2コリント 4・18)

人はうわべを見るが、主は心を見る。

(1サムエル 16・7)

そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に二つのとげを与えられました。(2コリント 12・7)

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになつた。(イザヤ 53・4)

思い通りに行動できない日々、朝起きると「主よ、私はどうすれば良いのでしょうか」とイエス様にお聞きすることから始めるようになりました。痛みに耐えるのは体力を使うので、効率良く一日を使わなければなりません。そのため自然と自分の行動に優先順位をつけるようになりました。その結果、イエス様の御用が第一、次が家族となったことで生活が一変し、喜びをもって生きられるようになりました。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

(詩篇 119・71〜72)

関節炎が進んで痛みが増して行く中、現実を見てしまおうと自己憐憫に陥りましたが、そんな時にはイエス様が、聖書を通して諭し、慰め、支えて下さいました。

六十歳の時に人工関節の体内寿命は三十年で、多分私の寿命と同じくらいだから今なら難しい再手術の必要性は低いであろうと、手術の番が回って来ました。当日、手術着に着替えた後、手術待機部屋のカーテンで仕切られた空間でベッドに横になる前に、付き添ってくれた夫が聖書を拝読し、お祈りをしてくれました。「アーメン」と二人で顔を上げると、カーテンが神々しい光を放ち、空間は清らかに満ちて、神様のご臨在を覚え、平安に満たされ手術を受けることが出来ました。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたが

たは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

(ヨハネ 14:27)

手術は成功、回復も順調、リハビリに励み、もう足を引きずって歩くこともなくこれで普通に生活できると思ったのですが、主のご計画はそうではありませんでした。身体の内側の関節がすでに関節炎を起こしていたのですが、軟骨がなくなつて骨が削られる股関節の痛みの方が大きく、気付かなかったようです。このように術後は、大きな「とげ」(苦痛)が除かれましたが、小さな「とげ」が身体の内側に与えられており、これまでと同様にイエス様に手を引いていただく日々です。

ちょうどこの頃に、英語しか話せない娘婿と聖書の話ができるようにと長い間祈つて来ましたが、英語で聖書を学ぶ機会に導かれ、毎週木曜日にBSF(Bible Study Fellowship)に通うようになりました。BSF

リカ、中南米とあらゆる人種が集まっています。それはあたたかもヨハネの黙示録に書かれている光景を見ているようで、私がその群衆の一人であることに感動を覚えます。

あらゆる国民、部族、民族、言語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手持って、御座と子羊との前に立っていた。彼らは、大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」(黙示録 7:9-10)

BSFに通い始め、しばらくすると娘婿の母親が私とバイブルスタディをしたいと言ひ出しました。私は、教えることは無理と、代わりに聖書をプレゼントし、一緒に聖書を読みました。彼女は大喜びで、その後、お札の文書が送られてきました。その宛先がBSFと書かれているので、どういう意味かと聞くと彼女の答え

は、宗派を超えて、純粋に聖書やイエス様についてもっとよく知りたい人々のためのもので、本格的な聖書の学びをするため、出席するには予習や宿題をこなさなければなりません。祈りながら英語の聖書と日本語の聖書に加えて辞書も用いつつ、喜びをもって八年間も継続できていることは、イエス様のお力です。たとえば、聖書を貫く一貫性。全能の力を持ち永遠であられる神様の神聖さ、偉大さと完全さ。どうしようもない人間のみにくさと罪。イエス様の愛と罪の贖い。聖霊の導きなど、これらを時間をかけて丁寧に学べることは、かけがえない体験です。二〇一九年九月から始まった新年度の学びのテーマは「使徒の働き」で、学びが始まる前から楽しみにしていました。ここでは、多くのクリスマスチャンとの出会いがあり、互いに課題を出し合つて祈り合う恵みも与えられます。移民で成り立つカナダらしく、出身国は実に多岐にわたり、ヨーロッパ、ロシア、中東、アフリカ、インド、東南アジア、中国、韓国、アメ

は「ベスト・フレンド・フォーエヴァー(Best Friend Forever)」とのことでした。確かに、今私たちはイエス様にあってBSFです。主人の母と私の母が大の仲良しで、いつも二人で手をつないで楽しそうにカナダに遊びに来るのを見て、私も将来、娘の義母とこんな風に仲良くしたいと願っていた通りのことをイエス様はこんな方法で叶えてくださいました。

イエス様に救われて二十二年、イエス様のご計画の素晴らしさを体験して来しました。イエス様と歩む人生には希望があります。道に迷う時には手を差し伸べてくださり、歩みあぐねている時には背負ってくださいます。この世に逆戻りする時には、光を当てて、十字架の下に連れ戻してくださいます。十字架の下から湧き出すいのちの水を飲み、聖書のみことばからいのちのパンを受け取る時、喜びがあふれます。幸せになるように「幸子」と父がつけてくれた名前の通り、私は神の子とされ、天におられる神様を心から慕い「アバ、父。」

とお呼びできる幸せな者にいただきました。

(詩篇 23:1-6)

あなたがたは子であるがゆえに、神は、「アバ、父。」と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。

(ガラテヤ 4:6)

主は私の羊飼いです。私は、乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油を注いでくださいます。私の杯は、あふれています。まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいます。

館 幸子 (たちさちこ)

千葉県木更津市出身、立教大学社会学部卒業

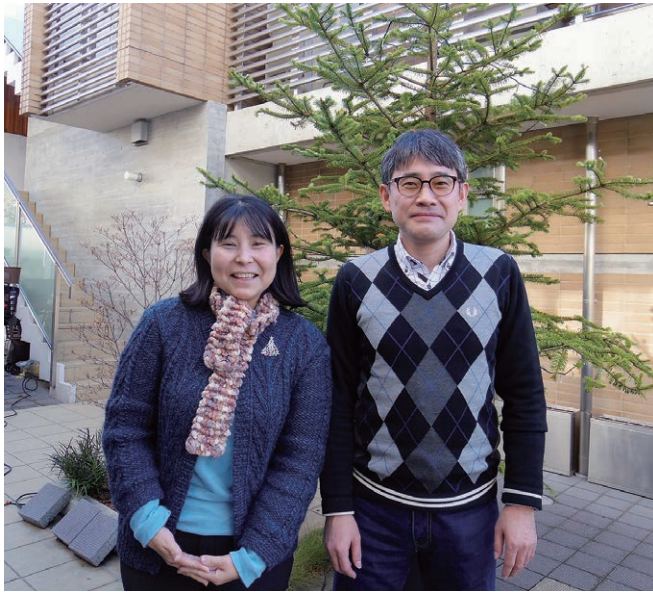
夫 芳博

娘 真里子

娘婿 ダグラス レヤス

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる

熊本 智春



充代さんと

「お前は相手の気持ちを考えたことがあるのか」と、まるでイエス様が私の耳元で語ってくださいったように私の心に鮮明に聞こえてきました。私が、イエス様に「本当の悔い改めをください」と祈った三日後の出来事でした。

私は、佐賀県の片田舎で一九六六年に男兄弟三人の末っ子として生まれ、みかん農園を営む両親のもと、恵み豊かな自然に囲まれながら暮らしていました。小さい頃は活発な少年で、悩みもなく伸び伸びと過ごしてありました。目立つことが大好きで、人の前で面白いことをしたりして人気者になることに喜びを見いだすような子供でした。

中学生になると、正義感からリーダーシップを発揮して、学級委員や生徒会の副会長などをして満足してありました。小、中学時代は自分の思い通りに事が運んでいき、人気者で目立つ存在となっていた私は、こ

れが本来の自分であるかのように錯覚^{さくかく}して、他の人と自分は違うと高ぶっていました。勉強もある程度できておりましたが、私は頭が良い人と思われるより、良い人間と評価され、人から慕われることに重きを置いていました。

そして高校二年生の頃、突然、胸を押さえられるような不安に襲われ、それが二日間続きました。この経験が怖くて、「また起きるのではないだろうか」と、このことにとらわれるようになっていきました。それが今も苦しんでいる強迫性障害の始まりでした。それからというもの、人が近くにいることが気になり、人の目がまともに見られなくなり、三人以上の人と話すのが苦痛になっていきました。その当時、そのような悩みを持っているのは恥ずかしいことだと思い込んでいた私は、家族にさえ話せず一人苦しんでいました。また、悩んでいること自体を知られたくないという変なプライドから、表面上は明るく振る舞っていましたの

を信じることはなかったのではと思っています。今考えると、これもすべてイエス様が背後で働かれていたからだと思います。

私が、東京の大学へ行くことを決めた一つの理由として、親元を離れて甘えている自分から決別して強くなれば不安の症状から解放されるのでは、と考えたからでした。自分が弱いからこんなわけのわからない不安にとらわれるのだと根拠もなく考えていました。大学生活では、ボクシングジムに通って体を鍛^{きた}えたりしましたが、結果は表面的なものが少し変わったぐらいで、心の中は相変わらずむなしく、不安の症状が続き、気持ち沈んでいくばかりでした。また、一人暮らしを始めたことも重なり、ますます不安な思いにとらわれていきました。とうとう「空(そら)」が気になりだす始末^{しまつ}でした。「空」が怖いわけありません。気にしているその思いにこだわり、いつまでも心の中で、その思いを引きずってしまうのです。とらわれている思いが

で、人と接することがだんだん苦痛になっていきました。そして人間関係もギクシャクすることが多くなり、「こんなはずではない。この症状さえなければ…」と、自分の不安の症状を現実の状況として受け入れることができませんでした。そのような高校生活を送っていましたので、勉強がおろそかになり学校の成績も悪くなりました。

そこで勉強より得意だった美術の方に進むことにして、一浪し、東京の美術大学へ進学しました。「熊本君にはちょっと難しいかもしれないけど、本命の大学と受験日が近いから受験してみれば」と、予備校の先生から勧められて受験した大学でした。その時の私の美術のレベルと実技試験での失敗を考えると合格したのは奇跡でした。また、東京の大学へ行くことが出来たのもちよつとした奇跡が重なって環境が整えられたからでした。後でふれますが、この大学に行かなければ吉祥寺キリスト集会へ行くことはなく、私がイエス様

気になり頭から離れず、苦しくなっています。

そのような時に、大学の知人から吉祥寺キリスト集会に誘われて行ってみることにしました。大学二年の時でした。誘われるがまま何度か行ってみました。私が聖書の神様を信じるようになるとは、とても信じられませんでした。「マインドコントロールされるのではないだろうか」「神様を信じたら自分の考えや思いが無くなりそうで怖い」「神様がいるのなら、どうしてあんな宗教戦争が起こるのか」など、疑問や不安が次々に湧^わいてきました。何でも納得しないと気がすまない私の性格からして、イエス様を信じることは無理だし、まだ虚勢^{きよせい}を張る元気があったからでしょう。宗教は、弱い人が信じるものであって私には必要ないと思っていました。しかし、その時にはわからなかったことですが、いや、認めようしなかったことかもしれない。すが、集会に行くたびに、何故か気持ちが落ち着きました。今思うと、集会の兄弟姉妹の自然な振る舞いや自

分を強く見せようとしないうちに真実なものを感じ取っていたのかもしれませんが。

何度か吉祥寺集会に行くうちに「本当に神様がおられるのなら試してみよう。この神様は祈りを聞かれると言われる。祈ってみて本当の神様でないかわから信じるのをやめよう」と思われ、とにかくイエス様に祈ることにしました。祈って奇跡が起こったり、自分の悩みや不安症状がなくなるわけではなかったのですが、イエス様を信じることに對しての私の抵抗感が徐々に薄れていきイエス様を信じることも悪くないと思いました。そして吉祥寺キリスト集会に行くようになってから三年半後の一九九二年三月、洗礼を受けることにしました。

しかし、この洗礼は自分が罪人であることに気づいていない「悔い改め」のない洗礼でした。そして主はそのような私を放っておくことがなく、この証しの冒頭で申し上げた「お前は相手の気持ちを考えたことがあ

をハンマーで殴られたような衝撃でした。「しまった、なんてことをしてしまったのか」と、崩れ落ちるようにひざまずき頭を抱え、「イエス様ごめんなさい。イエス様ごめんなさい」と泣きながら叫んでいました。

私は、自分の言動によって相手がどのような気持ちになるのか、相手のことを真剣に考えず、逆に、自分から褒められるのではないだろうかと思え、自分のことを第一に考えていました。私は、結局、自分自身のことを考えて生きてきたという自分のみにくい罪を知らされました。また同時に私が過去に犯した大きな罪も覆っていた独りよがりの言い訳が取り払われて、自分は地獄に行ってもおかしくない、いや地獄行きたと本当に恐ろしくなりました。「助けてください。助けてください」と祈るばかりでした。一時間ほどでしようか、私にはすごく長く感じたのですが、私の心にイエス様の十字架が迫ってきました。「ああ、ここに救いがある。このためにイエス様は十字架に架かって

るのか」という主の声を聞くこととなりました。それは、洗礼を受けて八か月が過ぎた頃のことです。ある出来事をおして、一部の兄弟姉妹の私への態度が変わり自分は何か間違っているのではと思われ、イエス様に「本当の悔い改めをください」と祈った三日後のことでした。今思うと、自分自身に本当に呆れて情けなくなり、自分の犯した罪は棚に上げ、自分が信仰的に正しいのではと勘違いした言動が原因でした。

今まで私は、「熊本君は優しい人ね」「良い人ね」とよく言われていました。だから、私も自分自身のことをそのように思っていました。優しく出来ない自分、良い人を演じることが出来ない自分は「不安の症状があるから」「本当の自分はそうではない」と都合の良い言い訳をして、本当の自分の姿を知ることなく勘違いを続けていました。しかし、この「お前は相手の気持ちで考えたことがあるのか」という主の御声は、言い訳ができない光となって私の心に突き刺さりました。頭

くださり、私の罪を贖ってくださったのか」と、それまで何度も聞いていた聖書の中心テーマであるイエス様の十字架の意味をハッキリ教えてくださいました。そして、ようやく頭を上げることができ、聖書が言っていることは本当だとその時、強く思われました。

そして「もう自分中心の生き方はしたくない。イエス様に従って生きよう」と思い、それからはイエス様に真剣に向き合わざるをえなくなりました。しかし真剣になればなるほど、それまでいい加減に読んでいた聖書のみことばを中途半端にとらえることができなくなっていました。元来、完璧主義で何でも納得しないと気がすまない性質の私は、それまで学んだ知識と違うように思えるみことばにぶつかる、そこに引っかけり深く考えこむようになりました。自分の頭で考えれば考えるほど苦しくなりイエス様の数々の奇跡も宇宙人だからできたのではないだろうか、本当に愚かなことを真剣に考え悩みました。一つのこと

やく解決したと思った矢先に別の箇所につっかかり、次から次へと問題が変わり、一種の信仰ノイローゼのような状態でした。ただイエス様に「助けてください」と祈るばかりでした。そのような状態がしばらく続く中、次のみことばがこの苦しみから私を救い出してくれました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。
(マタイ 11:28)

このみことばを読んで、ハッとさせられました。私は、それまで信仰で得た知識などによって問題から解放されるのだと思っていましたが、そうではないことに気づかされました。イエス様は「わたしのところに来なさい」と言われ、後は「わたしが…休ませてあげる」と言われました。だから、私に必要なことはイエス様

のところに行くだけで「休ませていただけるのだ」と気づかされました。そして自分であれこれと考え込むことをやめて、イエス様にゆだねていくうちに疑問や不安はありましたが、少しずつ楽になっていきました。それと同時に私自身にますます光が当てられ、自分の罪をさらに知ることにもなりました。罪を知り、罪を認めることは苦しみでした。最初の頃は、なかなかその罪を認めることができませんでした。イエス様の十字架のみわざは罪の赦(ゆる)しばかりか、その罪を認める勇氣も与えてくださいました。そして主の救い、聖書の真理は、私のそれまでの生きる指針、考え、思い込みから私を解放して自由にしてくださり、イエス様を知る前とは違う平安、喜びをくださいました。

あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。
(ヨハネ 8:32)

これらのことは、私の強迫性障害の対処にも変化をもたらし、主にゆだねることによって不安の症状が大分楽になっていきました。イエス様に祈れば、また集会に行けば平安、喜びをいただく。そんな状態が七、八年続きました。この状態が長く続けばよかったのですが、主は私をさらに砕くために私にとって大きな試練を与えられました。

私は聖書を読んだりメッセージを聞いたりすると、イエス様の恵みより、戒めに心が向いてしまう傾向がありました。それに加えて自分の高ぶり(きょうご)と虚栄(きょうぎ)からですが、個人的な信仰の悩みや疑問などはイエス様によつて解決することが大事で、兄弟姉妹との交わりの中で悩みを打ち明けて解決するのは人間的で良くないと考えるようになりました。聖書の読み方も知らない私は、徐々に自分本位の信仰になってしまい「主に従わなければならない」「主に従うことが祝福の道だ」とイエス様ではなく、行ないや思い描いた祝福ばかりに

目が向いてしまい、自分にとらわれた歩みとなつてしまいました。また、私に何か悪いことが起こると、自分に原因があるのだと判断して、「あの罪だろうか？」と自分で自分のことを分析して、自分ばかりに目を向けていました。

そしていつの頃からか、主の前に罪を犯したと意識した後、背中がしびれるようになりました。初めの頃は、症状が軽かったのですがそんなに気にはしていませんでしたが、次第に症状がひどくなつていき、「何かがおかしい」と思いながら自分なりに祈つて聖書を読んでみても律法的な箇所ばかりに目が留まり、この症状はイエス様からの答えだと考えるようになりました。そして思い当たる罪から出来る限り離れることを自分に課して、まるで修行僧のような歩みとなつてしまいました。そして強迫性障害の症状と相まってだんだん身体的にも精神的にもおかしくなつていき、無理して参加した二〇〇四年のロサンゼルスでの「喜びの集い」

をきっかけに原因不明の発作が起きました。その後も、胸を押さえつけられたような苦しみ、体中のしびれ、息がもとにも出来ない発作が何度か起きてしまい、私の自律神経のバランスが完全に乱れ、強迫性障害の症状もひどくなってしまいました。この時以来、私の体調は今も優れません。その頃のイエス様は、私にとって「怖い神様」となっていました。

あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。
(ローマ 8・15)

原因不明の発作が起きてから一年ほどは、イエス様に対して腹を立てていました。私なりに祈って行動していたつもりだったので、どうしてこのような状態になったのか納得がいかず、せっかく落ち着いていた強迫性障害の症状が、もはやコントロールできないほど

悪くなってしまったことへの怒り、後悔の思いから、イエス様に祈りはするものの、心の中は不平不満ばかりでした。

ですが、やはりイエス様がなされることが最善と聖書は言っていますので、私に何か問題があるとしたか思えず、今までの自分本位の信仰を捨て、出来るだけ兄弟姉妹の交わりの光の中へ出て、悩みを打ち明けるようにしました。

私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。
(1ヨハネ 1・3)

それと同時に聖書のイエス様の赦し、十字架、恵みについての箇所を何度も読み返し、心の内の思いを正直に祈り続けました。そうするうちにイエス様との関係が徐々に回復していきました。

私は、イエス様の十字架の贖い^{あがな}によって、私の罪が

赦されて天国に行けることは確信しておりました。しかし、現実の信仰の歩みの中での個々の問題に関しては罪の赦しを素直に受け取ることができず、確信は曖昧^{あいまい}でした。イエス様が流してくださった聖い血潮は、父なる神が私の罪を赦し、私を義と認めてくださる完全な救いの代価^{いんが}でしたのに、旧約聖書のみことばなどに引っかけ、因果^{いんが}応報^{おほう}的な考えから抜け出せずにいました。

私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によつて得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味です。
(ガラテヤ 2・21)

素直にイエス様の十字架の赦し^{ゆる}を受け取ることが出来るようになってから、罪を意識した後や、素直に従えなかった後に背中がしびれたり、胸を押さえられる苦しみは消えました。

また、この試練を通して気づかされた罪があります。

それは私が「自分の栄光」や「自分の願望」を求めているということ。信仰的に素晴らしい兄弟と思われるたい、集会で良い人と思われたいという気持ちがあるが、主に従うと言いつつながら、その動機は、「自分の栄光」、「自分の願望」を求めていることが大いにあったということです。残念ながら、今もこの思いは私の内に根強くあります。ですがこの罪を知らされて、この罪から離れることを覚え、たことは、私の信仰生活にとって大きな恵み、平安、喜びとなっています。

神は悩んでいる者をその悩みの中で助け出し、そのしいたげの中で彼らの耳を開かれる。
(ヨブ 36・15)

強迫性障害でプレッシャーに弱い私は、人前に出ることや、何か重要な事の前には不安の症状が止まらな

くなり、身体が苦しくなることがあります。そのような時は、主の前にへりくだり、小さくならざるを得ません。しかし、そうした中で主は私の心を探り、光を当て、平安の道へと導いてくださったり、医学的な助けを与えてくださったり、不思議な方法で心身を整えてくださったりと、私の弱さの内に主が働いてくださり、私の歩みを支えてくださいました。主は、弱い者、みじめな者の味方です。

わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。

(2コリント 12・9)

私には、感謝なことがあります。それは約十二年前に充代さんとの結婚が与えられたことです。育った環境や性格が違う二人の結婚生活において、現実的に色々な問題もありますが、主を中心として歩める二人

におられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。

(詩篇 23・1～4)

熊本智春(くまもとともはる)

一九六六年 佐賀県三養基郡基山町(みやきぐんきやまちょう)生まれ、基山中学校卒、佐賀県立鳥栖(とす)高等学校卒、多摩美術大学卒、東京S I M外語研究所(令和元年9月退職)

妻 充代(みちよ)

の生活は恵みです。私の弱さは、姉妹にも重荷となっていると思いますが、この病氣を受け入れてくれて、症状がひどくなった時には余計なアドバイスをせずに冷静に淡々と接してくれます。まさに私の助け手です。最後に、私は、自分の弱さやみじめさや苦しみを通して、主は信頼できる真実な御方であることを知りました。主は、私が不安や恐れで痛み苦しんでいても、平安や喜びの中にいる時とまったく変わらない愛で私を愛してくださいました。そして、次のみことばのとおり、主が私を導いてくださったことを申し上げてこの証しを終わらせていただきます。

主は私の羊飼。私は、乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざいを恐れません。あなたが私とともに



人の歩みは主によって確かにされる

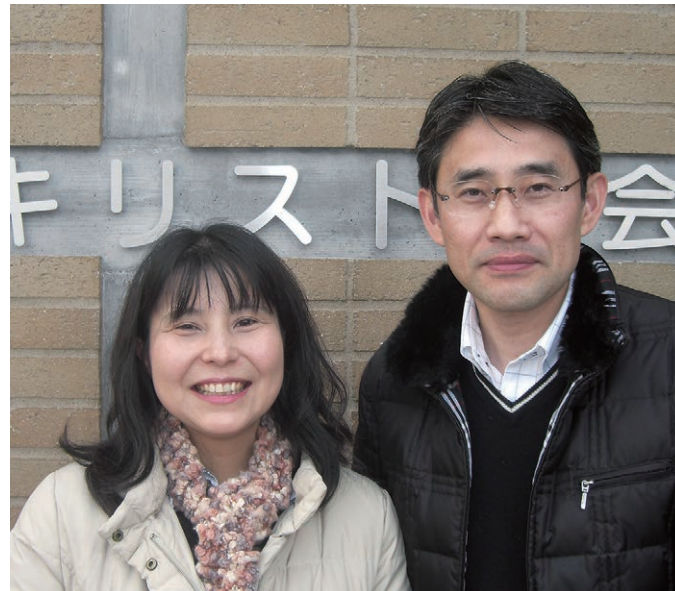
熊本 充代

わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。
(ヨハネ 7・38)

ある時、ある姉妹に相談したことがあります。「私の人生はどうしてこんなに困難が多いのでしょうか？あまりに不条理に思えます」と。その姉妹は「そう思った時には祈りなさい」と言われました。そのやり取りの後、私の人生は大きく変わりました。

私は、三人兄弟(姉、兄、私)の末っ子として東京で生まれ育ちました。

私は幼い頃、重い麻疹^{はしか}にかかり、生と死をさまよい、懸命な看病により回復しましたが、後遺症で右耳の聴力をほとんど失いました。聴力障害というのは、見た目には理解されにくく、見えない障害と言われているのです。そして、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるから



智春さんと

である。」(2「リント12・9」という素晴らしいしみことが支えです。

父は、公務員の傍ら^{かたわら}翻訳家として多忙な日々を送っていました。浪費家でお金の使い方に無頓着^{むとんちゃく}な父は、家賃が払えなくなると転居を繰り返し、十数回ほど引越しをしました。

二つ上の姉は努力家で秀才、スポーツ万能で、あこがれの存在でした。私は、親や周りの人から姉と比べ続けられたため、何かに挑戦することを極端に怖がる子どもになっていきました。一つ上の兄によくいじめられ、姉はそんな私をかばってくれました。中学生になった時、「こんな私ではだめだ」と思うようになり、苦手なことにも挑戦し変わったところもありましたが、心の内面の臆病^{おくびょう}さは変わりませんでした。

主との出会い

中学一年生の春休み、先にイエス様を信じて救われ

6人の証し

Unser Herr lebt

ていた母から誘われキリスト集会の軽井沢キャンプに初めて参加しました。そこでは、聖書の話ばかりでうんざりして帰りたいと思い、まともに聖書の話が聞かなかったのですが、ルカの福音書15章の放蕩息子^{ほうたうしこ}の話に心が動きました。なぜかその放蕩息子が自分と重なり、いつか放蕩息子のような気がして急に不安になり、このお父さんみたいな神様がいてくれたら：と思いました。

集会の方から私にと言って渡された聖書を、母は、私の性格を知っていましたので「どうせあなたは読まないでしょ？」と、冷たい口調で手渡しました。それを聞いた私は、親の言葉に反発するかのように聖書を熟読しました。

イエス様のパリサイ人、律法学者とのやりとりや、取税人、罪人と過ごす様子などを通して、イエス様の深い洞察力、慈しみと愛のあるお人柄を感じ、子供ながらに感動して涙が止まりませんでした。

その頃の私は人の顔色をうかがい、人の意見に左右されていました。誰の意見にも確かな答えはなく、好き嫌いや人の気分が変わる態度に思い悩むことがたびたびあり、何を信じればいいのか迷っていた私に、聖書には答えがありそうだと直感しました。

また、幼少時に同級生を事件で亡くしたこと、私自身も幼少時に生死をさまよったことから死を意識し、先に教会に通っていた姉ともよく聖書の話をしていました。それは、今までの価値観を大きく変えるものでした。それから、私は、困った時の神頼み的にはありませんでしたが、時々祈るようになりました。そうすると、不思議なことに人のすべての考えに勝る神の平安を少しずつ感じるようになりました。

中学3年生の時、千葉県に転居したため、近所の教会に通うようになりました。高校受験は「一番ふさわしい学校に導かれますように」と祈り、私立高校に入学しました。

「持っているものはある日突然取られても、何一つ不思議なことはない」。

その当時、私の日記に書いてあった言葉です。今まで何とかなるという甘い考えでいた自分を深く反省し、将来についてとても不安になりました。

また、姉は、摂食障害の症状で拒食症と過食症を交互に繰り返し、精神不安のために泣き叫び、非常に苦しむようになりました。

ある日、借金の保証人が家に怒鳴り込んで来たので、親は夜逃げの計画を立てましたが、夜逃げをされないようにと取立ての人が家に泊まりこむことがありました。電話も止められ次々に起こる家庭の問題で私は訳がわからなくなり、無力で何もできず、生きて行く意味を見出せなくなって、友人にも悩みを打ち明けられず自ら命を絶とも思いました。

ところが不思議なことに、そのたびに思い止まらせることが起こりました。後でわかったことですが、私

聖書の教えに惹かれながらも、その中の厳しい律法は、どれも守れそうにありませんでした。そこでもつと聖書の知識が欲しいと思い、読み進めるうちに、律法を守れない私も十字架により救われていることが示され、特別伝道に来られた盲人牧師の力強いメッセージに感銘を受け、洗礼を受けました。

救われてからの歩み

洗礼直後の高校一年生の夏、私は、父の副業の失敗での莫大な借金のために私立高校を中途退学せざるをえなくなりました。

家庭の事情で中途退学したことを知らない一部の大人の好奇の目に晒され、私は、非常に悔しい思いを幾度となく味わいました。「いつか見返してやる！」と歯を食いしばりながら頑張ってきましたが、人の目を気にして教会に行くのも苦痛になり、やがて行かなくなりました。

を心配した母がイエス様に祈っていたからでした。

恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。

(イザヤ 43:1、4)

私は、高校を中途退学した後、アルバイトをしながら通信制の高校に二年間通い、試験で高校卒業の資格を取ることができました。

そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。

(ローマ 5:3〜5)

6人の証し

Unser Herr lebt

これは、試験の時にお守り代わりに持つて行ったみことばです。

それから、摂食障害で非常に苦しんでいた姉は、二十歳で自ら命を絶ちました。私が十七歳の時でした。亡くなった姉と対面したとき、今まで苦しんでいた姉の顔と、まるで違う安らかな笑顔を見て、私は安心し、天国に行ったと確信しました。姉が救急車で運ばれた病院には、真夜中にもかかわらずベックさんも駆けつけて祈ってくださいました。

葬儀は吉祥寺集会で執り行ない、会堂に入りきらないほどのたくさんの方が来られました。私は姉の死を通して、姉の分も生きようと決心してキリスト集会に再び通い始めました。

しかし、姉の死は、私の予想以上に、家族の深い苦しみとなりました。姉の死後、氣落ちした母が「時計の音が何か言っているように聞こえる」と言うので、音の出ない時計に買い替え、母の幻聴はおさまりました。

「ないことになってしまった」という自責の念に苛まれました。

集会に通い続けたのも贖罪の気持ちからだったように思います。また、イエス様と姉に「死なないように」とお願いしたことも、これ以上私が問題を抱えたくない、悲しみたくないというどこまでも自己中心的な罪だと示され、心から悔い改めイエス様の十字架は私のためだったと、実感しました。

私は様々な辛い体験がトラウマとなり、辛い時の記憶が鮮明に蘇るフラッシュバックが起きたときは冷や汗や恐怖感で何も手につかなくなるほどでした。姉の死後六年間程、眠れなくなりましたが、兄弟姉妹との交わりに支えられました。その当時、ある姉妹から頂いたみことばです。

わたしは彼らの悲しみを喜びに変え、彼らの憂いを慰め、楽しませる。

6人の証し

Unser Herr lebt

私も怒り、悲しみ、喜びなど、全ての感情が鈍くなり、涙も出なくなりました。特に辛かったことは、笑うことを忘れてしまい、作り笑いをしていたことです。心から笑うことに後ろめたさを感じていたのです。姉が召された直後は実感が無かったのですが、半年経った木枯らしの吹く頃、帰って来ない姉が「もういない」のだと初めて実感し、涙が溢れました。姉の遺品のアンダーラインがびっしり引かれた聖書の中からイザヤ書59章1〜2節「見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」を読んだとき、胸が締めつけられるような苦しい気持ちになりました。

私は姉に対して「怖くてお見舞いに行けなかった」「もっとそばにいればよかった」「ダメな私がいなくなり、優秀な姉が残れば良かったのに」「取り返しのつか

あなたの泣く声をとどめ、目の涙をとどめよ。あなたの労苦には報いがあるからだ。…あなたの将来には望みがある。
(エレミヤ 31:13、16、17)

このみことばは、将来への希望など微塵も考えられなかった私には希望となりました。絶望的な現実や周りの状況ではなく、その先にある希望を求めているのだと思います。

姉の死後、数年経って兄にも変化が起きました。夜中に突然、家を飛び出し、街を彷徨い歩き、妄想や幻覚症状が起きて、自ら精神病院に入院しました。

集会で洗礼は受けていましたが「自分は（聖書に出て来るたとえの）毒麦なのではないか」と思い込み、たいへん苦しんでいました。二〇〇八年頃、様々なストレスから、たびたび自傷行為が見られるようになって、目が離せない状況となりました。さらに心を閉ざし、関わりが難しくなっていました。

「私たちは無力です。おゆだねします。どうか最善に導いてください」と私たち夫婦で祈りました。兄の精神科主治医に相談すると、もしもの時には入院をと勧められました。

ある夜、兄の友人から電話があり「(兄から)自殺予告の電話をもらった」との知らせに、兄の所に急行したところ、自らを傷つけていたため説得し入院しました。入院中、両親から頼まれ兄の引越しを手伝いましたが、兄の自分勝手な振舞いに抑えていた感情が噴出し、兄を責めてしまいました。

現在は在宅サービスを受けながら一人暮らしをしています。私や家族、イエス様にさえ心を閉ざした時期もありました。このことを通し、私は兄への愛のない態度や肉(生まれながらの自分中心の性質)で行なうことの恐ろしさを主から示していただき、悔い改めました。

その兄も、その後、イエス様の十字架が自分の為だった

れていった患者さんが何人かおられました。看護師の仕事は、信仰がなくては続けられなかったと思います。

神は、どのような苦しみときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。(2コリント 1:4)

結婚

私の姉との最後の約束は「クリスチャンホームを築いてね」というものでした。「結婚するなら同じ土台で、人ではなくイエス様が第一であるように」と、祈り、そんな中、智春さんは、私の兄と親しくしていたので、良い印象を持ち、結婚のことを祈るようになりましたが、なかなか導きはありませんでした。みことばや兄弟姉妹との交わり、祈りを通し、「大事なのは神様との関係」と示され、私の祈りは、「自分の思いはどうでもい

とハッキリ示され、神様に受け入れられていることを確信し喜ぶ者に変えられました。昨年、肺がんと診断され、片肺切除という中でイエス様に頼り平安を与えられています。

仕事を通して

私は幼いころからの夢だった看護師への進路をあきらめていましたが、姉を看病するうちに再びその思いが、わきあがりました。姉が落ち着かず眠れない時、そばに寄り添い、聖書を読むことで姉が落ち着いて眠れた姿を見た時の安堵感に、私は、やつとやりたいことが見つかったという思いがしました。

看護師になってからは、病人やその家族と接していくうちに、自分がその人たちに慰めるものを何も持っていないこと、そして無力であることを思い知らされました。しかし、そんな私にもイエス様は数えられないほどの恵みをくださり、イエス様に救われて天に召さ

います。ただ神様のみこころがなりますように」という祈りに変わっていききました。その後、不思議な導きで智春さんに私が結婚のことを祈っていることが伝わりました。智春さんからのプロポーズまでの期間、戸惑うこともありましたが、祈ると平安でいられるようになり、その後、結婚に導かれました。実に祈り始めてから十年後の出来事で、まさに待つ事には意味があり、「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。」(伝道者 3:11)というみことばの通りでした。

結婚指輪に刻んだみことばは、「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」(ペブル12:2)を選びました。

結婚して、お互いの生活習慣の違いや様々な好みなど、最初から本音でぶつかり合うこともありましたが、みことばや祈り、交わりを通し主が働かれ最善に導い

てくださいました。その中で、主人は、様々なことをきっかけに精神的に不安定になることもあり、弱さが与えられています。その度に主は憐れみ守ってくださいました。二人で祈り、イエス様にお力を頂いて歩む日々です。

夫婦で仙台の親戚に福音を伝える機会を与えてくださいて祈っていましたところ、仙台の親戚の佐川美紀さんは真如苑の信者でしたが、聖書のほうがわかりやすいと言ってくれ、一緒に祈り、後に結婚した岩槻利克さんと二〇一九年五月四日、御代田で受洗の恵みにあずかりました。

両親の介護と死別

母は、二〇一二年に肺の一部を切除したのをきっかけに、徐々に日常生活を送ることが困難となりました。主治医と対立し一年半の受診拒否。腎不全で一年間の透析の後、二〇一八年十一月十一日に召天しました。

こされたのだ」と夫婦で同時に思われました。担当医に一時期不信感を持ちましたが、そのことを示されて事実を受け入れられた事は奇跡だと思いました。主のお計らいにより、最善の導きをいただいたと感謝しております。

母は、生前、苦難の連続でしたが、イエス様がいつも支えてくださり、悲壮感はほとんど無く平安そのものの人生でした。

父は母の死後、老人ホームの夫婦部屋から個室に移りましたが、わずかその半月後、心不全のために入院しました。

父に対して、私はある時から全ての家の問題は父の浪費癖のせいだと憤り、長年心を閉ざしていました。しかし、「あなたの父と母を敬え。」(マルコ7:10)のみことばが心に痛く突き刺さり「この思いから解放してください」と祈りました。そんなとき、イエス様の「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分で

私は看護師のため「親が病気でもあわてないでしょ？」とよく言われますが、自分の家族が病気だと家族の立場や治療する側の立場が分かるので、様々なケースを想定し最悪な事まで考えてしまうので複雑な思いになります。結局、人に出来ることは限られていて生命は主の御手の内にあるのです。

母は、腎不全で最後は透析医が頸動脈に誤って針を刺し、そのことがきっかけで意識障害を起こしました。そのことは大変ショックでしたがその後、母の透析治療に限界がきて透析ができなくなりました。もし、意識のある時に透析ができないことを告げられたら、「死を待ただけ」の状態となり、死の恐怖と腎不全末期の症状に苦しんだことでしょう。

また苦しみを和らげるために意識レベルを下げる鎮静剤を使うことを選択することは、私にはできなかったかもしれません。その様なことを考えた時に、イエス様は、母が苦しむことのないように「意識障害を起

わからないのです。」(ルカ23:34)のみことばに出会いました。

私の父は幼児期に、父親(私の祖父)を戦争で失っていました。祖父の操縦していた戦闘機がソ連軍に攻撃され、モンゴルの大平原に墜落したと聞かされました。そのような父も、やはり苦しい思いを抱えて生きてきたことになり、親も完璧ではない。不完全だと、思いを変えられていきました。父の問題を通して、裁くのは主であることを示され自らの傲慢さを示されました。

肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。(ローマ 8:6)

父は、以前、集会に何度か行った時、「信仰はわからない」と言っていました。私たちの祈りに頭を垂れ、黙とうし、時には涙ぐんでいました。

6人の証し

Unser Herr lebt

父の心不全は一旦回復しましたが再度悪化し、亡くなる数時間前に入院中の病院から意識レベル低下の為、呼び出しの連絡が入りました。

父は「イエス様を信じましょう」の呼びかけに反応し、頷き、手を強く握りました。二〇一九年六月九日に召天いたしました。主は家族の救いの約束を守られ、成就してくださいました。

終わりに

様々な試みを通し、自分自身の無力さや底知れない罪を示され、サタンは「おまえの信仰はどこにあるのか?」「どうせ助けてもらえない」とささやき攻撃してきますが、そこに目をとめていると、簡単に泥沼にはまり込みそうになります。そのような時にあらゆる努力をしても、そこには終わりは無く、答えも無く、むなしさだけが残ります。これがサタンの常套手段で、姉もこの罠にはまってしまったのだと今は思うことが

を喜ばれる。その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。

(詩篇 37:23~24)

というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。

(ローマ 11:36)

熊本 充代 (くまもと みちよ)

東京都新宿区出身、川越高等看護専門学校卒

夫 智春 (ともはる)

できます。一方、自らの無力さを知り、みことばに頼り、トンネルの先のかすかな光、希望だけを見ながら祈ると、最善にいつの間にか導かれているのです。これが信仰なのだと思います。悩みながらも喜び、希望を見出すのです。

私が求めてきたものは「どのような状況にあっても変わらない幸せ」でした。病や障害や、あらゆる困難にもかかわらずです。

今まで、さまざまな試練を通して、多くのものを失ってきましたが、それに優る平安が与えられています。通る道は曲がり角だらけでしたが、振り返ると真っ直ぐにされています。

二〇一五年夏、姉の高校時代の親友がベック兄とイエス様についてお話をした後、「(良いことも悪いことも)全部つながっているんですね」と喜んでいました。

人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道



キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

【電話】0422-21-8450（集会所）
東京都 武蔵野市 吉祥寺 本町 4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会 10:30 / 18:30

火曜学び会 11:00

木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:30

中高生日曜クラス 9:30

【バス】ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によることばをもつてなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものではありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらさげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

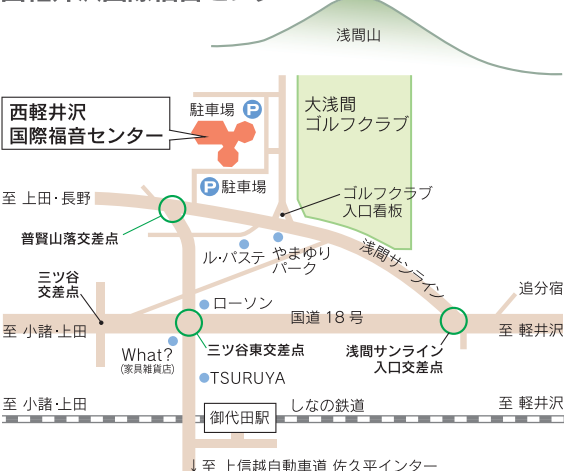
家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターははじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
【電話】0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
【電話】0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201

アクセス

【鉄道】
しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで 約5分 (1000 円程度)
徒歩 約45分 = 3 Km
御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】
上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分 (約7km)
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒とすることができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと - ヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ - 私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

実を結ぶ命 がんのうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そここのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにもかも私たちが神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物



主は生きておられる 第53号

定価100円（税込み）2020年3月15日発行

編集スタッフ

岩本秀造 黒澤錬二 鈴木力

芳我幸雄 福留伸子 牧野正士

印刷・制作

ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団

題字デザイン

飯守恪太郎

発行所

キリスト集会

サイトマップ(キリスト集会のご案内) <http://christ-shukai.net/>